
明治二十八年七月廿四日發兌
女鑑
第九十號
東京國光社

女鑑第九拾號目錄

貞女せい子



女鑑 第九十號

博物思想

淸德高操、是れ婦人の最も貴ぶ所、之を養ひ、之を修む、其の間一點の懈怠を容れず、啻に之を容れざるのみならんや、日夜鞠躬、猶、且、其の及ぶ能はざるを恐る、蓋、一旦其德操を壞れば、如何なる手段も、竟に其後を善くすることと難ければ也。

然れども圓滿なる德操は、必、圓滿なる智識と伴ふべし。智は德に因て動き、德は智に因て伸ぶ。二者相濟ひ、相進み、茲に一箇の堅實なる能力を鞏め、然る後、一身修むべし。一家齊ふべし。一國の事業に當るも、將た何の踟蹰する所

あらんや。

家政に於て、育兒に於て、衞生に於て、敎育に於て、慈善に於て、其の他、百般公私の事務に於ても、弊を除き、利を興し、復雜なる社會に立て、其の目的を達せんとす。單に學、識、才、智、理等に恃む、素より危險也。然れども獨り德、愛、仁、情、憐等に偏するも、亦頗る迂濶なるを見る。

斯の理由と事情とに基き、吾人は今の時に於て、本邦の婦人が、深く其德操を涵養すると同時に、廣く其智識を開發せんことを望む。是れ文明の進度に伴ひ、眞、善、美なる未來の國民を養成せんとする者の責務を盡すに於て、緊要缺く可らざる重件たれば也。

新なる國民を訓育する者は、新なる思想を要し、新なる智識を要す。少年は將

來の國民にして、而して女性は將來の國民を訓育するものなり。未來の國家を組織する要素たる少年、若し未來の國勢に相應する能はずんば、其れ何を以てか、國權の擴張を計らむ。國富の增殖を期せむ。況んや向後の日本に於てをや。今日は興國の轉期也。然れども退嬰姑息、一歩を誤らば、或は反對の結果を招くやも知るべからず。國利民福、談曷ぞ容易ならむ。軍備、航海等の事業は、別に其人あり、然れども、堅實雄偉なる新國民を造る、一半の要務は、女性の雙肩に懸ることを記臆せよ。然らば則ち、新智識の開發、豈一日も之を缺くべけん哉。

天地と少年、少年と天地。二者果して何等の關係かある。吾人は謂ふ。少年は宇宙の中心に超立し、宇宙は少年の腦裡に宿ると。即ち少年の心事と、天地の

眞趣とは、其間殆と竹膜を隔てざるを見る。彼等は人間の自由を知らず。社會の幸福を知らず。蓋、其の束縛と禍難とを感ぜざれば也。彼等は獨り造化自然の活世界に逍遙するを以て生命とするのみ。彼等は洵に博物世界の大王也。彼等は洵に博物世界の大王也。然れども斯の大王や、腦裡空虚、未だ曾て博物的智識の一滴だも味はず。故に未だ禽獸蟲魚の何物たるを知らざるなり。草木金石の何物たるを知らざるなり。日月晴雨の何物たるを知らざるなり。水火飲食の何物たるを知らざるなり。故に唯之を吹き込む者の智識教授に因て、馬も鹿と爲り、鹿も馬と爲り、水火以て鬼神たるべく、金石も時に人と語るべし。嗚呼個中の消息、誰か能く之を知る。

其の幽を探り、玄を鉤するは、專門學者の事、何ぞ吾人の説と關せむ。獨り事

實に於て、我が國の婦女に博物思想の甚だ乏しきは、豈賢良なる姉妹の弱點に非ずや。家庭教育及び日常の衣食住に要する、普通の程度の博物學の智識は、女性と雖も決して之を遺棄するを得べからず。顧ふに本邦の女性や。情感に於て頗る富むも、理想に至りては未だ大に稚弱を免れず。吾人新智識の開發を唱ふ。豈偶然ならん哉。

夫れ博物の學たる。其の研究講說の結果、直接に四肢に觸れ、五官に感じ、能力の比較的に幼稚なる、女性及び小兒に對し利益最も多しと爲す。而して其間に無限の趣味ある清課たり。惜むらくは、現今の女性が理學思想の闕遺する、其の家庭敎育に至重の關係ある、博物的智識を具へず、爲めに燃るが如き年少子弟の新智識を拘塞するのみならず、往々之を舊慣誤謬に導くの虞あるを。博物

思想豈養はざるべけんや。博物思想は、まことに本邦の婦人か智德兼濟上の一大要素たる也。

人は名ををしみ虎は毛を惜む
人のふりみて我ふりなほせ
人はみかけによらず
人は善惡の友による



論說

女子處世論（二十二）

三輪田眞佐子

結論

抑、しをりせで、山深くわけ入るものあらは、迷はざらんと欲するも得べからじ。熟、女子の世界を見るに、初、世を笑ふもの、後、これを恐るゝに至り、先、揚々として、劣者に、その榮華を誇るもの、遂に、泯々として、權門に、哀を求むるに及び、あるは、富みて、無聊に苦み、貧うして、働役に勞れ、あるは、美貌のため、貞操を破り、醜容のため、配偶を得ず、あるは、無學にして、人間の受くべき幸福を味はで、空しく終るものもあり。修學の方針を誤り、世望にそむき、止むを得ず、獨存して、晩年をかこつものもあり。あるは、離縁、不

和、破產、夫の惡性、境遇の不愉快、世人より來る擯斥などの災禍に惱む女子あり。一家團欒、子孫榮え、家名揚り、心中、餘裕ありて、世人、歸依するなどの幸福を享くる女子あり。要するに、かくの如き千種萬別の結果を、悉、天命なりと言ふべからず。又、偶然なりと信じ難し。されば、人力をつくして、りの不幸を償ひ得られざるべきものにしもあらず。さるを、なほ、自暴自棄して安んずるものあるは、愚なる至とぞ云ふべき。故に、おのれは、以上の如く、幸、不幸の岐るゝふし〴〵を述べて、處世の心得とはなしつ。蓋、世の、處世を論ずるもの、稍もすれば、虛飾、僞善、および、權略を言ふも、おのれは、これを、蛇蝎の如く認む。故に、おのれは、斷言せん。處世の要は、正路を踏むにあり。正路を踏むものは、永遠に榮えんと。是を以て、本論は、道德を、本

體より言はで、唯、結果より述べしものなり。されど、區々錯雜にして、讀者に、要領を得しめざりしならんことを恐る。由りて、左に、全論の大要を概言せん。

一、人には、各、天分定りあるものなり。故に、女子たるもの、女子の天分を離れて、世に立たんとならば、魚の、水を離れて生きんとするに等しく、恒に、逆境に陷りて苦まん。果して、この理を知り、女子一生の方針を定めなば、自招く不幸ばかりは免るべし。試に見よ。女子、分外の事を行ひ、分外の言を吐きて、終を全うせしもの、古今、世に、幾人かある。本論の條項は、この理に基く所多し。その心して讀みねかし。

二、人の違ふべからざるものは、原因、結果の理なり。善因をなさで、善果を

望むは、さながら、良き種を蒔かずして、良き實を得んとするが如し。女子、身に、智德を具へずして、徒に、人より尊敬せられんことを希ひ、不如意のあまり、女權など唱へて、反りて、擯斥を受くるもの多し。誠に憐むべきことの限なり。總べて、德なきものは棄てられ、智なきものは用ゐられざるは、いさゝかも怪むに足らず。故に、おのれは、信用を得んとならば、德行をつとめ、事を遂げんとならば、忍耐せよ。貧を惡むものは、節儉、および、勉勵せよなぞ述べたりき。凡、女子の、一生を誤る始は、自個の慢心に在り。戒むべきことにこそ。

三、女子は、身分の權衡を保つこと、最、必要なり。しかるに、世の女子、およびその父兄たち、この理を悟るもの少きにや、處女の配偶を撰ぶにも、自

分より高き位置の人を好み、服裝なども、分限を越ゆめり。又、學問の如きも、位置、境遇上、優等の女子にして、はじめて修むべきを、反りて、身分、品格上、劣等の女子、多く、究學するを以て、その結果、高尚にあらまほしき女子、平凡に流れ、高尚ならずもがなの女子、高尚に失し、共に、權衡を得ず。是を以て、女子社會に、常に、奇觀を存す。古人曰はく、物、平を得ざれば鳴ると。宜なり。世に、夫婦の離婚、一家の不和絶ゆるなきは。

四、人の運命には、常數あるものなり。定量あるものなり。故に、身、および、心を苦めて働く日を經んものは、安堵快樂の曙に達すべし。淫恣放逸の後は、困難辛苦來るべし。その樣、さながら、潮の、この濱に滿つれば、彼の涯に引くが如し。現に、多年、學窓に潜みて、女業を忘れ、文事にのみなれし女子、そ

の能ばかりは、幾分か、世人にもてはやされんも、男子めきたるとかにて、その誹謗せらるゝ苦しさは、無文にして、輕蔑せらるゝ口惜しさに等しかるべし。又、早婚するときは、女學をなすに暇なく、さりとて、學事に、多年を費すときは、嫁期を失ふことを免れず。實に、かく、利害得失、相伴ふものなれば、中庸を守りてこそ、能く、身を處し得べけれ。

五、凡、人は、心に、快とすることを行ふを以て、その生を樂む。されど、快樂に、有德、不德の二あり。不德の快樂は、多くは、肉體上のものにして、一時ばかりのものなるのみならず、苦痛の相伴ふものにしあれば、必、願ふべからざるものなり。唯、有德の快樂は、殆、精神上のものにして、永遠つゞくものなるのみならず、若き少女も、老いたる婦女も、共に、樂、餘りあるものに

ざある。例之、良人は、貞節をつくし、小兒を、賢明に育つることを樂む如きものなり。孟子曰はく、安心立命の法は、有道を樂むに外ならずと。

蓋、おのれが、これまで、女子處世上欠くべからざるものとして掲げし條項は、徒に、放言をなしゝものにあらず。古今、東西哲人の、共は認むる以上の眞理に基き、日本女子現今の情態を觀察して、外國の風、いやまし吹かんも、大和撫子、種な盡きずと思ふ心を述べしなり。されば、新奇、人を驚かす能はざるも、世の人、愛孃を敎育せらるゝ父母たちの參考、並に、處女立志の方針となるにちかゝらんか。されど、尙、もしは草、かき誤れる言の葉も多からん。あづさ弓、引き見ん孃たち、よきふしのみを撰びてよ。

女子の任務

横井健雄

女子の道徳のめでたきは、男子の品行のいみじきよりも、一層、優に見ゆるものなり。それとおなじく、惡しきことは、また、格別、惡しく見ゆるものぞかし。

そも〳〵、女子は、國家の根、生民の源とて、男子の企ておよぶべからざる特種神妙の能を具ふるなり。この能は、これを、愛といひ、或は、單に、情といふ。情の感じ、愛の化するにあたりては、湯火も去り、鬼神も避く。その時ありて、變ずるにあたりては、鐵を泛べ、葉を沈め、晝を、夜として、人を、畜にし、乾坤を破摧して、百物を、糜粥にすること、由來、枚擧に遑あらず。古の書にいへることあり。女の髮すぢにてよれる綱には、大象もつながれ、女の

足駄にて作れる笛には、秋の鹿、必、よると。まことに、畏るべく、驚くべし。その國家と、相俟つこと、男子よりも、緊急にして、その擧措の善悪、ともに、人の視聽を聳すは、決して、偶然のことにあらざるなり。

しかはあれど、世人、なほ、女子の懿なる所以をしらず。女子も、亦、甘んじて、男子の輕蔑を分として、恬として、相察せず。これ、いかんぞ、不當無稽の甚しきものといはざるべけんや。それ、國家は、女子を俟ちて生る。女子なければ、人生なく、人生なければ、國家なし。これに由りて、これを見れば、女子、即、國家といふとも、あへて、過言にはあらざるべし。女子の一擧手、一投足、あに、輕からんや。

且、その表面の如何に論なく、其の事實、男子よりも、女子は、夥多の權利を

有し、重要の任務を負へり。國家の榮は、自身の辱として、國を以て、家とし、常に、身を以て、自、任ずべきもの、女子の外なるべからずして、しかして、國家は、男子の國家にして、女子の國家にあらずといふが如き妄想あるを得ざるなり。

蓋、西洋の男女同權といふが如きは、吾人は、もとより、可認せず。されど、閫外の事務、一切、女子に與らせずといふ東洋古來の陳説になづむことあたはざるなり。たゞに、能はざるのみならず、大喝疾呼、その不當の言にして、非理の語なることを鳴らさずはあらざるなり。

今、その、世儒の、婦道を講ずるを聴くに、常に曰はく、夫唱婦隨と、又曰はく、牝雞之晨、家之索矣と。これを釋きて曰はく、たとひ、いかなる事情あり

とも、夫の命ずる以上は、婦は、つゝしみて、奉從し、いかゞ、つらく、悲しき節なりとも、堪へ忍びて、よく遵守するをば、婦人の操とはいふなりと。又曰はく、婦人は、萬事、謙遜して、可成的、控へ目にするぞ宜しき、傲り慢りて、男子をしのぎ、多辨長舌、人と競ふなどは、いみじき僻事なりと。いかさま、唱隨は、所謂聖人の敎にして、牝雞之晨とは、僭越をにくむ辭なり。しかれども、夫唱婦隨は、もと、これ、發言の序次をいひしのみ。夫の說は、何にても和すべしとの謂にはあらず。もし、何の事件にても、必、賛成すべくば、何を以てか、家政整理の責任をつくすことを得ん。はた、婦として、夫に先つは、固より有るべきことにあらず、男を凌ぎ、人と競ふは、もとより、美事にあらず。しかれども、卑々屈々、百事、唯々として、只、命、惟、奉ずるのみ

をば、あながちに、婦道とはいひがたからん。規すべきは、これを規し、正すべきは、これを正し、しかのみならず、自己の利益を圖り、その見聞智識をひろめ、品位を崇くし、威儀を大にし、人事世故に通達し、時務を識り、機宜を理むべし。此の如くするにあらざれば、もて、今の世に於いて、婦道をつくすといふに足らず、所謂聖人の道は、時と移る。あに、常に、守株して、膠柱するにあらんや。且、それ、傲慢多辨のにくむべき、謙遜辭讓の好みすべきは、男子といへども、同一のみ。ことに、女子のみ、然るにあらず。しかも、謙といひ、讓といひ、或は、謹といひ、愼といふこと、亦、みな、人により、時により、事と、品とによりぬべし。過則猶不及。中庸正當のこと、必、謙に限らず、慢に在らず、阿附するのみにもあらず、抵抗するのみにもあらず。詮する

に、義に合ひ、情に悖らざるを要とすべし。孔子の、身脩而家齊、家齊而國治、國治而天下平。と書けるを見ても、女子の責任、輕からずして、しかも、所謂聖人、ことに、重を、女子に置きし意を、明々に知るに足らん。

且、事は、順を要す。水の流る、これを下るは易くして、上るは難し。山の高き、これを、攀ずるは、難くして、下るは易し。この理を以て、これをいへば、本を理むる才を用て、末を治むるに、何かあらん。女子、時に、閫外に出でゝ、進みて、國事につくすとも、毫も、害なきのみならず、將に、利あらんとす。よしや、國家の利をなすには至らずとも、進みて盡すといふ心掛は、つねに忘るべからず。古來、女子の、國事に堪へし例は、事實に徵して、餘あるなり。まして、雜劇繁多の事業鄭重詳密の機務等は、ことに、女子の要を見るをや。（未完）

史談

貞女せい子の傳

鹽井ふく子

神の生せ給へる御國なれどにや、我國には、おやしき草木にも、かぐはしく、すぐなるが多く、鳥獣のいやしきにも、又操の正しきがあり、人のきはは殊更にて、貞烈なる女子など、今も昔も、いと多くきくことにて、或昔物語に、さる人、娘に聟をとりたるが、いくほどもなくて、其夫みまかりけれど、兩親は、その娘のいと若くて、夫なくなりたることを、かなしくおもひ、異夫にあはせむとなしたるに、娘はそをうちきゝて、あはれ、父母の仰せには侍れど、此儀はうけひくべくも覺ね侍らず、若しわが身、いつまでも、男に具すべき過世ならむ、先の夫こそ、死せずて、あひ具して侍らむものを、夫に具すまじき報あれど こそ、先の夫のはやう失せたるならめ。身の報いならむ、幾度夫を迎へむとて、世に久しかることかたからむ。かまへて、おもひとまりたまへと云ひけるに、父母はなほもきかずして、さるあさましき事な云ひそ。父も母も、既に老いたり。いつまである世かは。無からむ後は、汝如何にして、世に住まむとか思ふ。すぎつるは弱かりしからに、はやうしたり。此度は、よく人をも体をも擇らびて、迎へむに、如何で過世などのあるべきと云ふを、娘はなほもうけ引かず。斯く申さむ、をこがましくは侍れど、燕とやらいふ鳥すら、異なる雄鳥には伴

れじと云ふを、人と生れて、恥かしき業には候はずやといへど、父母はなほゆるさざれど、娘はさらば我家に年毎に來りて、巣づくる燕あり。其雄鳥をば殺して、雌鳥をば、しるしつけて、放ち遣り玉へ。他の雄鳥をば具して來らば、其折にこそ、父母の御心に從ひまつらめと云ふに、兩親も、そはれもしろしとて、雄なるを殺し、雌鳥には、赤き糸をつけて、放ちやりぬ。

年かはりて、鴈の歸る頃になりぬ。燕や如何にと、待ち居りしに、燕は赤き糸をつけたるまゝ、ひとり歸り來りしが、巣をもいとなまず、悲しげに、秋霧深くなれる頃、いづくともわかず、飛び去りぬ。

娘はいふもさらなり、父母も、いと悲しくあはれにればねて、其後は、娘の心にうちまかし、夫の事は、いはで止みしとか。人も鳥も、誠にめでたくあはれのものに侍らずや。

今此處に說き出すせい子といふも、又此昔語りの女子にも劣らぬ心ばね、身の掟、貞操正しき妻なりけり。せい子は、神奈川縣下、井戸谷村の農なる辰藏といふ者の妻なり。天性いと怜悧に、且つ柔和にて、春の新田鋤きかへす業より、早苗を取り、水を堰き、田草ひく夏のいとなみ、秋の刈穗に至るまで、夫が田畑の業を助け勵みて、假初にも、つらきをれはねず。家にあるときは、糸をつむぎ、機ををりて、かるかやのつかのまも、怠らず。家のため、夫のため、始終まめやかに振舞へど、夫なるも、誠に二なき者によろこび、いと睦

じく繼ることなくて、三年四年すぎぬ。さるに、一日辰藏の常に似ず、田畑にも出でず、何となう心ひきた丶ぬやうなれど、こは必ず日來の勞れならむとて、まめやかにいたはり慰め、己れ一人田に出で丶、終日いそしみ暮し、菅の小笠に月のさす頃歸りては、また機をおりて一夜を明したるが、その翌日も、また昨日のごとく。辰藏は、ものをも云はず、何事か憂に堪ざるもの丶ごとくに、一室に閉ぢ籠りてさへあるに、せい子はいとやすからずおもひ、こは必ず年月の辛苦の、つもり〳〵ての煩ひならむと思へど、如何にもして、憂さをなぐさめむものと思ひ、己が織りてし布をぞ、人にひさぎて、わづかに酒肴を整のへて、室なる夫の前に持ち行くに、夫は如何にしけむ、踊り上りて、壁なる利鎌を取るより早く、一打ちに膳器をうち破り、なほ狂ひて、やにはにせいをぞ取らへ、頭髮をむざ〳〵と切り捨てたり。せいは、早くもその發狂せしを悟り、たゞちに鎌をぞ奪ひ、心の落着くやう、さま〴〵と慰めこしらへ、醫藥よ祈禱よと、彼れ是れと心を盡くして、看護等閑なかりしかど、狂氣はやがてしづまりて、もとのやうなれり。

さて、いつまでか、徒らに人の田畠を耕すべきかはとて、夫婦相談なして、横濱に來り、北方村といふ處に移り住まひ、さ丶やかなる商業をぞなすこと丶なりぬ、然るに、辰藏又其資本の少くて、おもふやうならぬを憂ひてにや、心再び狂亂し、俄に剃刀を取出で、熟睡したるせいが咽を刺して、

已れも共に自刃せんとして、少しく腹に突き立てたるが、狂ひたる心の、とみに夢の覺めたるごとくなりて、余と余の業のあさましく、愕然として居たりしに、近き人々馳せ集り、二人を介抱なし、醫をも呼び來りて、疵をも縫はしめなどしけれど、幸にさまでいたくもあらざりしかど、日ならずして、傷は癒えたり。

さる程に、せいの父なる人、かゝることの、一度ならず二度までもありしをきゝ、恐れ惑ひて、せいをも取りもどさむとて、或日媒と共に來りて、離別をも云ひ出しに、辰藏は我心にあらぬも、我振舞の、あさましく面目なく覺ゆれど、拒む辭もあらず、ろがいはるゝまゝに、離別狀をも書かむとするに、せい子はいと悲しみて、涙をはら〳〵と落して、男にこそ七去の教はありとも、女子には未ださるためしは聞き侍らず。たとへ恐しき病あれどとて、夫を去りて、妻が何處にか身を立つべき。よしや身をおく所は、何處にか有りともせよ、夫を捨てゝは、妻たるの道を、いかにかせむ。病は常ならず、いつかは癒えなん時もあらむものを、父上誠に我をかなしうればさぞ、さるれろろしき事、仰せずもとて、ひたなきに泣きて、乞ひけれど、父もまた、さりとてもいふべき辭なくて、歸りぬ。されど、夫の病は、兎角に去らず、やゝもすれど、狂るはむとするに、せい子はいとど悲しさに堪へず、神に祈り、佛に賴み、夫の病の起らぬやうにと、一心に念じつゝ、又夫のかゝる病の起るも、貧苦よりの業なりと思へど、晝夜

をわかず、商業に心を盡くし、手細工に寸時もやすまず、片時も夫に等閑なく仕へ、父よりは、なほ幾度となく、歸れかしと云ひおこせど、さる事は耳にも入れざりけり。辰藏は、せい子が父の心をも知れど、且つ已の病の又起らむ事を氣遣ひて、或日せいに向ひ、御身が今日までの心づかひは、山も海も譬ふべきものなく、いつかは忘れむ、いつかは捨てむ。去かはあれど、徒らに斯る辛苦のうちに、二人袖を連らねて、身をこがさむよりは、今より、已れ一人にて、兎も角もならむとおもふなり。御身は、年なほ若し。家に歸りて、何處なりと、然るべき所に、身を寄せ、老父の心を安め玉へといふに、あな我が夫の異な事をの玉ふものかな。妾いやしき家に育ち侍れど、忠臣は二君に仕へず、貞婦は兩夫にまみえずと申すことは、兼て聞き侍りぬ。譬へ貧けれどとて、夫婦共に共に、かくて睦く暮さむに、何か苦しかるべき。夢さるいま〱しき事をな云ひ玉ひぞと云ふに、辰藏は大に怒りて、我實は御身を厭ふなり。如何なる過世にか、おん身の顏色を見る毎に、むら〱と、心の狂ひの出るなりとて、憤り強く、つかみ出さんとするを、妻は袖にすがり、さてはさることにて、御身の病の起り玉ふにか。さはいへ、妾は、おん身をぞ、我世の夫と思ひ定めてし上は、今更に操をぞかへむとも思はず。君をおきては、あだし夫をも、重ねじとおもひ侍れど、いかに厭ひ玉ふとも、嫌ひ玉ふとも、此處は去るべくも思はず。願ふは、かくて唯傍におき玉へ、もしろをも厭ひ

玉ふとあらば、うちも殺しも、おん身の思ふ如く爲し玉へ。妾は露ばかり怨みは候はじとて、去る氣色もなきに、辰藏はなほ許るさねど、さらばとて、剃刀をぞ取り來り、のう我夫、おん身は、飽く迄も、いとはせ玉へ、妾は、また飽くまでも、慕ひ奉るなり。後の世をも誓てしおん身に捨てられ侍りては、如何で此世に存命ふべき心あらむと云ひさま、自害せむとするに、辰藏はいたくおどろき、周章ておしとゞめ、こや我妻、我惡しかりき。我も誠におん身を厭ふ心に非らず。唯おん身が辛苦にくるしむ事のいとほしく、我にはあさましき病などのあれば、いかばかりおん身が心の哀しからむと思ひて、斯くは云ひしなり。御身だに、さる心ならば、我又如何でか去らんやと云ふに、せいは初めて安心なし、此後とも、必ず〳〵、さるいま〳〵しき心をば、云ひな出し給ひそとて、其後は、優りて夫をぞいたはりぬ。

又父が方へは、妾は親の許し給ひて、辰藏主の妻となりしなれば、如何なる事の、夫にありたればとて、夫が家を離るべく思はじ。もし强ひて歸れと仰せ給はゞ、妾も必ず心狂ひて、自ら死んのみとて、云ひ送りけれど、父なる人も、其志の正しきをぞ感じて、又其後は、何事もいはざりけり。せいが商業に手細工に、さばかり心を盡くして勵むとすれど、遂に生計の道立ねば、止むなく店を閉ぢ、世話する人のあるまゝ、佛國人の商館に雇るゝ事となりて暮したるが、明治六年、十一月の三日といふ日の曉、辰藏又例の疾ひ起りて、ふ

と起き上り、庖厨に入り、洋人所用の大斧を携へ來りて、かくとも知らず、夢なは靜かなる妻が頭腦を、一打うちけれど、せいはおどろき覺めて斧をも奪はむとすれども、痛手なれど、目眩みて、定かに見ゑず。辰藏は、さながら猛虎の荒れし如く、いよ／＼猛り立ちて、二度三度かへして打ちたれど、何かはゑ怺へむ。あつとさけびて、仆れたる此物音に、近き室なる洋人も、何事なるかと、走り來り、大におどろき、忽ち人を走らしたれど、檢使も來り、醫師も來り、媒妁人も來りて、いたはるに、せいは枯野の虫の、いとあはれなる音に、やうやく媒約人に、妾は先に父の命をもきかず、をん身が言葉にも從はず、破談せざりし上は、いづくまでも、いつまでも、辰藏どのゝ妻なり、先に夫を去れ歸れと仰せ玉ひし時、既に死なんとこれもひし身の、今更にかくなる事を、悔しき事も悲しき事も侍らず。此の上は、唯々夫の罪なきよしを、明白になし玉はむところ、今生の願ひなれとて、又官の人々にもうちむかひ、何事も夫が病の爲す業にて、夫には更に更に罪なきよしを、たゑ／＼に陳べ、我夫さらむと、莞爾とうちゑみ、葉末の露の怨むけしきもなく、其儘敢果なく消ゑたりといふ。女子は、誠にかくやさしく、かく正しく、斯く潔よく、あらまほしきものにこそ。

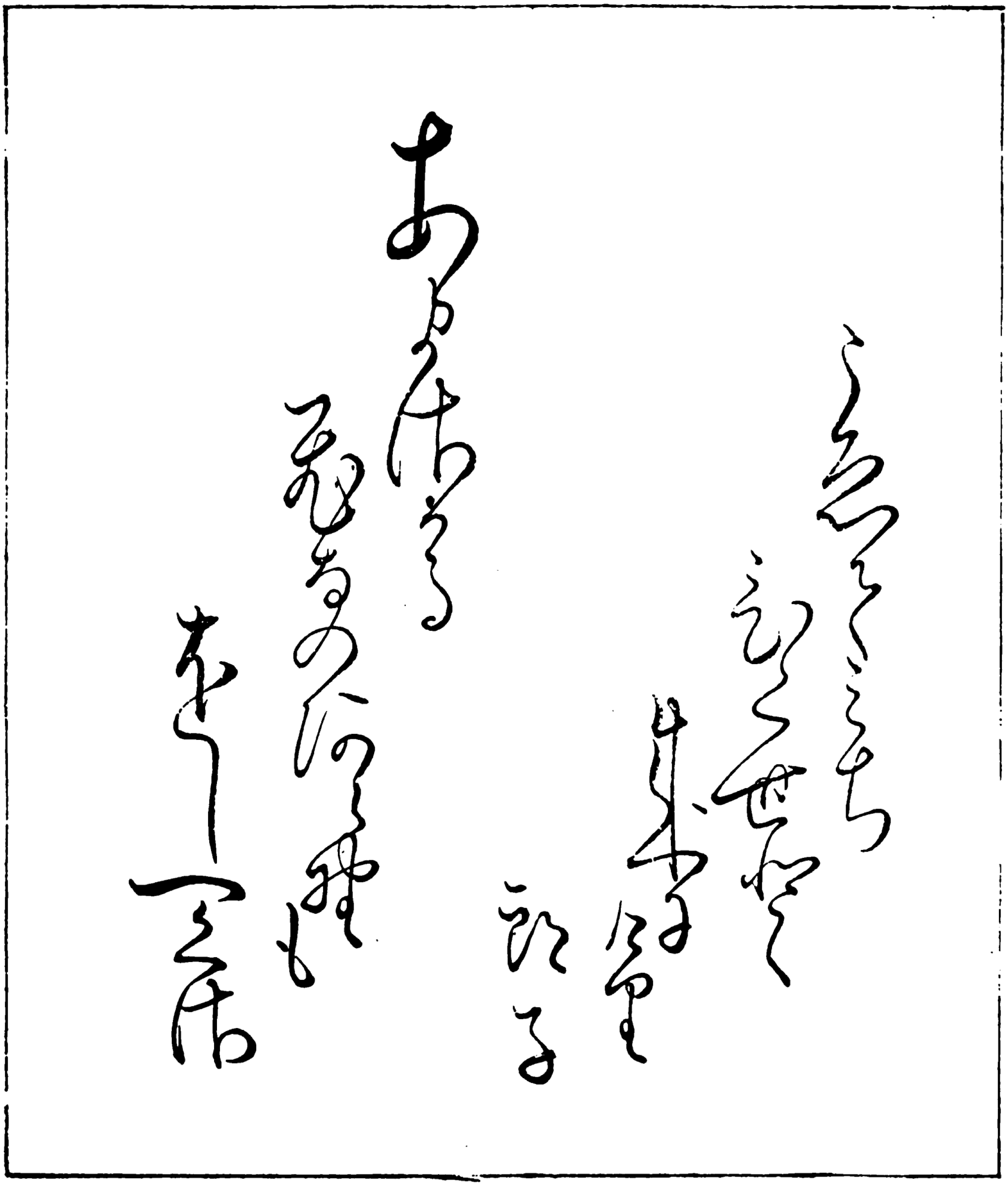
間宮八十子傳

故人　久米幹文

間宮の八十子の君は、もとの水戸の藩士久米彦助

博高君の次女なり、母は日暮氏名はみを子といふ、文政六年六月廿日小石川の藩邸の家に生る、博高君は和漢の學を兼て、弘道館の教職たりしかば、君は庭の訓のまゝに幼き時より何くれの書をよみ習ひつるが、とし十七の時贈大納言源烈公につかへまつりて、名を久米野といひつるに、公つねに愛し給ひて、我家の紫式部なりとのたまひき、さて十二年のほど仕へ奉りて、母君の病みて身まかれる時に暇をたまはりぬ、其後は家にありつるが、とし三十の時間宮永好大人に嫁き給へり、大人もとより皇國の學を以て世に聞えたれば、君專らその教を受ていそしみつるほどに、其名世にあらはれき、當時諸大名の北方姫君より大よそ人まで其教をうけつるものおびたゝしかりき、さて今の新御代となりて、大人神祇の大史にめされしかば、君内外の事に付て輔つる事少からず、大人身まかりて後は、前妻の一女に資明をとり合せてうしろみつるに、三人の孫さへ生れつるはてに資明身うせぬれば、君專ら家をとゝのへながら、あまたの弟子を教へみちびきつるに、其名雲の上にきこえあげて、皇大后の宮　皇后の宮にたびたびめされて歌奉りつるに　何くれの御物をたまはり、うち〳〵宮内に出つかへよなど仰事ありしかども、年老い身かよわくて公事にたふべくもあらずとていなみ申たりき、總て世に名を賣らんともせず、たゞもとよりしたしくむづまじき殿にはまゐりき、從一位松平慶永の君、從二位池田慶徳の君は、ことさらにめしまつはして、いとしたし

くせさせ給ひき、女のわざは衣のたちぬひ麻のう
みつむぎをもたくみにし、万の事いとつゞまやか
なれど、ろからやからにはいとねもごろにして、
つねに物などめぐみけれど、一家のものはさらな
り、門人にいたるまで慕はざるものなし、學の
すぢは永好大人か有職の學に通じたれど、ろをま
ねびとりつ、歌はもとよりこのむすぢにて、勅選
集家の集はさらなり萬葉にさへさかのぼりて、長
歌をもよみ出つ、又源氏の物がたりをこのみて、
つねに諸家に出てもはら講じしかど、古今をかね
つる歌のくちぶりいとめづらかなりと世人いひは
やしつ、人となりこまやかに心さゝてやはらかな
るものから、下にをゝしき心をもちてをとこまさ
りともいふべきことわりき、去年の秋より去ぞし
む病みておひ〳〵おとろへつるに、度々あやふき
さまになりつれど、たてなほしつるは、平生神道
を信ずる故なりとみづからもいひ人も去か思ひた
りき、今年一月のはじめつかた中風の病おこりて、
手も口もわなゝきゆがみつるが、神にいのり
て忽ちつねのやうになりつれど、二月の初に二度
病おこりて終にあつしくなりぬ、されど何の苦し
みもなく、十七日の朝眠るが如く息たえぬ、時に
年六十九なり、明る日東京谷中の玉林寺なる永好
大人のかたへに葬りつ、其詠る歌かけりし文ども
書集めて家の集つくるついでに、有こしことのあ
らましを記し添る時は明治廿四年三月十五日、か
く云ものはをひなる久米幹文なり、



前田侯爵夫人朗子筆蹟

家政

いけばな

田邊和氣子

此程女鑑編輯の君より、活花につきての一切の事を、世の少女の爲にかきてよとの給ひつれど、おのがつたなき業を世にはこり顔なりと、にくむ人もやあらむと、うしろめたうて、とかくためらひつゝおくらかしつるを、猶玉くしげ二たび三たび乞るゝも、もだしがたさに、とふ人もなき五月雨の窓に、梅の實も心もうみてつれ〴〵なるまゝ、つくゑの塵をも拂はずして、そこはかとなき筆のすさみ、夢か、うつゝか、おぼろげながら、こは、るゝ君へのせめふたげなれど、見む人さるかたにゆるし給へや、

活花を學ぶにも、進むと進まざるは、其人によるものなり、假令ば習字を十人ひとしく學びて、十人とも書家となるものにあらざめり、五十人讀書を學びて博士とも學士ともなる人、いか程かあらむ、勿論社會の人、技藝などをかろらかに思ひて、去むし學べは、如何なる人も、師となるべく思ひひがめるぞ悲しかりける、世の中かゝれどころ、近き頃技藝を敎ふる人に、木綿の衣服をかづく裁縫事を知りて敎師となり、薄茶の平手前のみ心得たる人が、茶人めかしてはらをふき、葉蘭五枚も野分のあしたの庭を見る樣なるかたちに挿て、活花の指南せむとするためし擧て數へがたし、哀れ世の少女達よ、かゝる師につきて學び給はゞ、

其業の進み難きのみか、しらず〳〵ひがみちに導かれて、ふみ迷ひ給ひなむ、されど何業を學ぶにも、初心より充分に、いたりふかき師につきて、物學び給はずば、あやしき結果となりなんかし、活花とは、何なる物ぞ、則ち草木の花を水に活て保つをいふ、其草木はいかにして生ずるならむ、則ち天地の氣に從ひて、春は霞とゝもにうちけぶる柳を始め、春を時として萌るもあり咲もあれど、夏の日影を待もあり、露深き秋を心として咲花あれど、冬枯の霜の下より咲いづる花もあり、一年のうち寒暖によりて、咲いつる花のことなるを見れば、草木おのづから心あるにあらずや、さるを、流儀によりては、花の性質をとはず、梅も、菖蒲も、水仙も、ひとしきさまに作りて蛇のはひめぐるが如き姿に挿み、花を愛でずして、ただ、おのが流儀に捻曲て物するは、活花といふ意に叶はずして、花の作り業とやいはむ、

假令ば、晴わたりたる小春の雲、紅葉が下てるあたりに植たる菊の花、薄く濃く、あるは房やかなる、あるはかすかなるも、心々に咲出たるは、何となうねんにをかし、

また淺草わたりに、菊の咲たるをつかねて、人の形ちを作り、歌舞妓のさまに物したるは、菊の花を賞くわんするにはあらで、菊もて作り業したるとやいはむ、

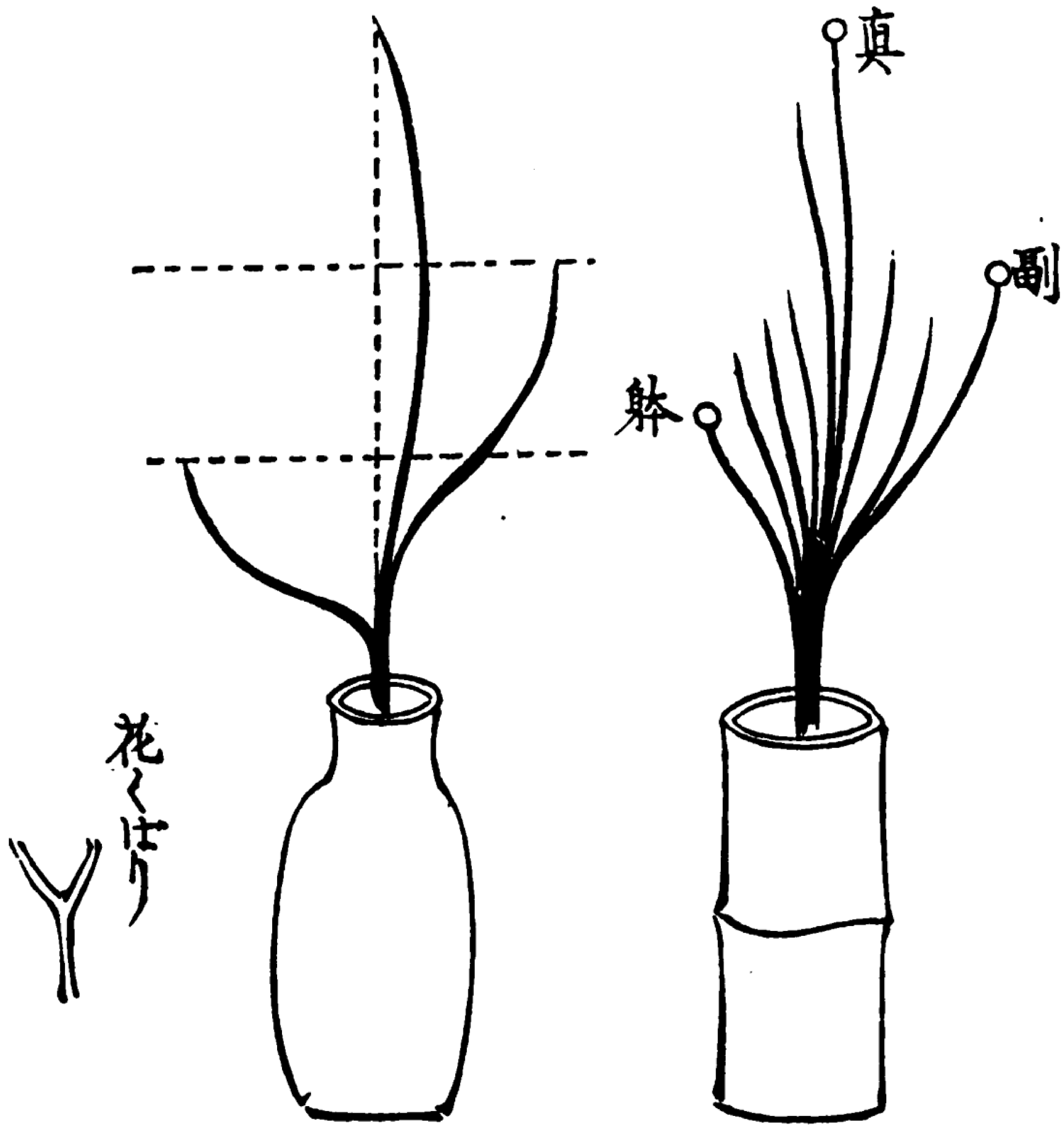
活花の流儀も、又さなり、天地自然の理をもて、其花の性質をたがへず、其花の質により定めし法則もて物すると、又流儀の一則もて草木を捻曲す

るとは何れか優美ならむ、ろは難波江のよしともあしとも、おのれは口を結びて、見る人の心〴〵にまかせてんかし、

池坊流活花の規則

は、眞副体の三なり、ある流儀にて天地人といふも其心同し、寸尺の法は、草木の長短によりて見計ふべき事ながら、眞副体の差は、三ッ割をもて定むべし、假令ば、眞三尺あれば副は二尺とし、体一尺としてよし。此眞副体の三本の外は、如何程加へても差支なし、但し初心の人は五本又は七本をもて活習ひ、稍進歩にしたがひ數をも多くするをよしとす、左に圖を出して初心の人の參考とす、

圖の如く眞副体の外はみなあしらひなり花くばり。は一本の方を前にしてよし



だいどころ

茄子の亀の甲焼

茄子を丸のまゝ能く洗ひ、二ツに割り、まはりをきりまはし中へ菱形に庖丁をいれ、油を塗り、金あみにのせ少し焼けたる時、最初牛肉鳥肉の類をあられ(小角)にきり、醤油にていり、鰹の煮だし味淋の煮ぎりにて、能き程に味を付け、其汁を菱形の庖丁目に注ぎて焼き、焼けたる後、皿に盛り味をつけたる肉をのせるなり。

茄子の鴫焼

茄子の皮を去り、四五分位の厚さに輪切になし串に刺し、胡麻油を塗り両側を焼き、又油を塗り、二度程焼き、味噌を付けて焼くものなり、味噌の拵へ方は味噌を擂り、うら漉にて漉し、玉子を擂り交せて、味淋の煮ぎりにて能き程にのばすなり、又最初くるみの皮を去り、よく擂りつぶし、前の如く漉したる味噌を入れ、粉山椒を擂り交せたるも香味ありてよきものなり。

茶椀蒸

茶椀蒸の仕方は、先づ煮だしを造り、沸えたちたる中へ醤油味淋を入れ、味加減をなし冷し置き雞卵を割り能くかき廻し、冷したる煮だしを入れ、又掻き廻し、前に茶椀に種物を入れ、この汁を種物の上より注ぎて蒸すなり。蒸方は蒸籠にて蒸すものなれども便宜によりて、釜或は鍋にて蒸すもよろし。分量は、茶椀三個の煮だしに雞卵三個

(大なれば二個)位の割合にてよし。種物は魚肉、鳥肉の類に味を付け、野菜は湯でゝ、能き程にきり、二三品位入れて宜し。

鯵の酢の物

鯵を三枚におろし骨をとり鹽をふり暫く置きて又酢に浸し少し置き毛拔にて小骨を拔去り薄く能き程にきり丼の類に盛る付合せは胡瓜、蓼、生姜、穗紫蘇の類を、細かにきりて鹽をふり、酢に浸し置き之ばりて甘酢をかけるなり甘酢は殆と味淋の煮きりと食鹽とにて、能き程の味に加減すべし。

おをじろ

こまかに切り、かつをぶしをけづりていれ、すこしからめに煮たるものもよし、

虎列剌病豫防法

大日本私立衛生會にて調査せるものは

●飲食物の注意

一虎列剌病は主として飲料水より傳はるものとす故に生水は決して飲むべからず一旦煮立たる水にても宵越のものは飲むべからず

一盥漱し又は食物、食器等を洗ふにも可成的煮立たる水を用ゆべし

一横濱函館長崎の如き完全なる水道の水は安全なれども汲置のものは宜しからず

一氷水未熟の菓物及び腐敗の疑ひあるもの其他露店の飲食物等は流行時に於ては飲食せざるを可とす

一氷を喫ひ氷水を飲むことは本邦人の習慣なれども急に消化器を冷却するが爲めに腸胃病の原因となること多し平生にても氷は多く用ひざるを可とす流行時に在ては殊更に注意すべし

一酒は平生用ゆる者の適度に飲むは害なし併し虎列剌除と唱へ強て用ゆるは害あるも益なし殊に燒酎ブランデー等強き酒類は可成用ひざるを可とす

一食事は時間を違へず程能く食ふべし平生食ひ馴れざる物を食ひ時ならぬ時殊に深夜に飲食するは總て不可なり

一溜飲又は腹下しを起し易き食物は用ゆべからず總て生物は可成之を避け一旦煮熟して用ゆるを可とす
一蠅は病毒を運搬することあり故に食物には蠅除けの裝置をなすべし

●身躰の注意

一身體は度々沐浴して清潔になすべし
一風引かぬ樣取分け寢冷せぬ樣注意すべし戸障子を明放し腹部を露して眠ることなき樣用心すべし
一少しにても腹工合惡き時は速に醫治に就くべし食中り暑中りにても流行時には早く手當を爲さゞれば虎列刺となることあるべし

●掃除の注意

一家の內外とも日々能く掃除し庭先に塵芥を止むべからず
一塵芥溜は日々掃除し其後に石灰乳を撒き置くべし
一床下も大掃除をなし常に不潔なる場所には石灰乳を撒き置かば大に可なり
一下水流しも日々之を浚へ雪隱は汲取りたる後に壺の中より周邊まで能く石灰乳を撒くを可とす又雪隱には總て石灰乳を備へ置き人の入りたる度毎に少しづゝ流し込むことゝせば大に可なり
一家內の風通しを能くし濕氣を止めざる樣に爲すべし

●交通の注意

一親族近付たりとも虎列刺病ある家には可成近寄るべからず近親の間柄にて餘儀なく見舞ひたるときは決して其家にて飲食すべからず假令病人に接近せざるも湯に入りて全身を洗ひ衣服を改めたる後にあらざれば他人と交通すべからず
一人の群集する場所には成るべく立寄るべからず

●病人のありし時の注意

一若し不幸にして家內に虎列刺病人の出來たる時は早く醫師を迎へて治療を託し總て消毒等の指圖を受くべきは勿論なれども事に臨んで狼狽せざる樣豫め心得置くべき箇條を擧ぐれば左の如し
(い)看護すべき人を定め他の家族は一切病人に接近せざる事
(ろ)吐瀉物は其器の上にあると便器中にあるとに拘らず石灰乳、石灰末又は石炭酸を撒布して消毒する事
(は)病人の苦痛を和げんが爲め芥子粉を溫湯に入れて腰湯を使はしめ若くは手足腹部を濕むる事
(に)諸種の賣藥等は濫りに用ゆべからざる事
一醫師檢疫官の來りたる後は一切其指圖に從て陰日向なく消毒其他の事を行ふべし虎列刺病人の吐瀉物には病毒となるべき黴菌を含むが故に其消毒を怠るものは人に毒藥を與ふるものと其理に於て同一なりと知るべし

一病人は可成避病院に入らしむるを可とす是迄は避病院の措置用意等不都合の點もありし趣なれども今年に至りては病室醫師看護婦飲食物等其他何事によらず大に改良することになりたれば安心して入院すべし自宅に於て療養するよりも却て安全なるべし

一病家ハ近傍に於ては成るべく病家と交通を絶つこと病家の井戸を用ゐざること、芥溜井に下水に屢々石灰又は石灰乳を注ぐこと、飲食物は總て一旦煮立てたる後用ゆべきこと等總て前文に掲げたる事項に一層の注意を加ふべし

●消毒薬の注意

一消毒薬は種々あれども就中廉價にして行ひ易きものは生石灰及び石灰乳なり然れども此品は貯へ方宜しからざれば變化して無効となることあるが故に全く石炭酸の用を廢すべからず

(甲)生石灰、密封して貯ふべし久しく空氣に曝露したる者は効なし

(用法)粗き粉末となして吐瀉物、便所、塵芥溜、下水等を消毒するに適す

(乙)石灰乳、生石灰一合に水凡一升の割にて製す密封して貯ふるか又は用に臨て製すべし

(用法)溶液を吐瀉物、便所、塵芥溜、下水等に撒布す

(丙)石炭酸水(二十倍)

(用法)病人を取扱ひたる人又は其衣服汚物を取扱ひたる人は石炭酸水を以て手足其他病毒汚染の疑ある場處を消毒し更に清水を以て洗ふべし

此のごろは

●七月廿日土用の入り、三日めを土用三郎といふ、書物、きもの、むしぼしすべし

さんしやうのみをとりてほす、土用三郎の日がことによしといふ

あさ、からむし、すげ、とくさなどかりとる、とくさは、あろみづにつけてほすべし、

水仙をほりだし、二三日ひにほして、こやしないれうゑかうべし、

●七月廿三日大暑

なでしこ、せきちく、實をとりてすぐにまく、大根、はうれんそう、このころよりまきはじむ、

●八月

このつき草をよくとれど來年くさ少しといふ、

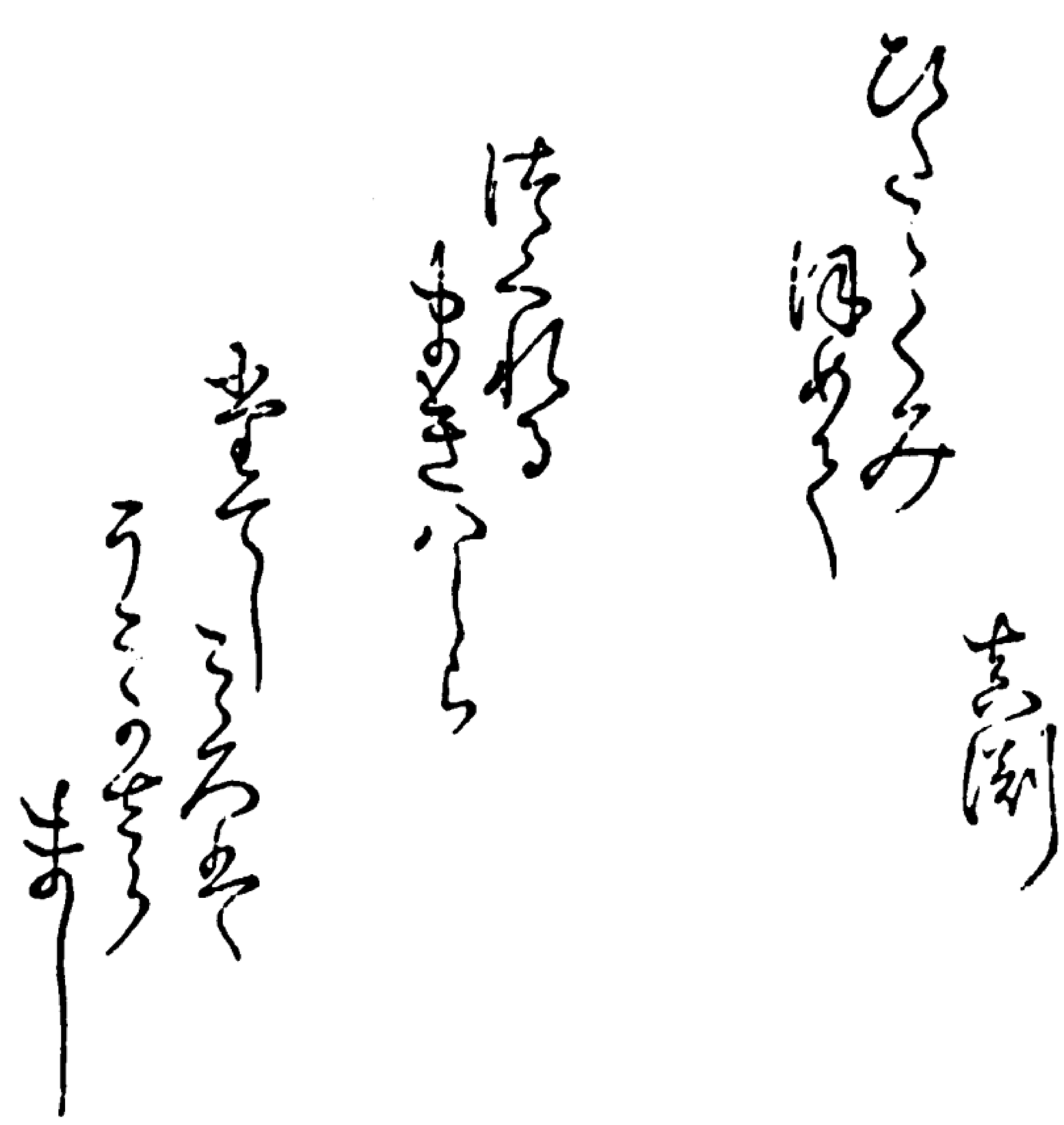
●立秋

かぶら、このごろまけど大きくなる、虫のつかぬやう、きをつけたるがよし、

此のごろの花

ひあふぎ　ぎぼうし　ひるがほ
ゆふがほ　とらのを　はす
さぎさう　かうほね　ひし
のうせんかつら　ふうらん　めうが
あさがほ

はちすはのにごりにしまぬこゝろもて
なにかはつゆをたまとあざむく



漫録

物は一具に及ばず

小山田與清

徒然草に弘融僧都が語を載て、物を必一具にとゝのへんとするは、拙き者のする事なり、不具なるこそよけれと見ゆ、げに己が目も耳も、必同じ形の物ならず、されどとて一具にすべきやうなし、一目つぶれたりとて今一目をつぶすべくもなし、片足痿たりとて今一の足折べくもなし、されど家居調度衣服など、一具に對せずともさて有べし、書物も美本を好むは益なし、文字鮮明に、紙質よく、蟲くひ、穢なくど、一冊は大形、一冊は小形、一冊は寫本、一冊は刊本、とりもじり、表紙冊々表裏違ても苦しからじ、疊も古も新も、備後表も琉球表も、まじりてよし、萬の物これになずらへ知べし、これ節儉を守り、陰徳を積むわざ也、易の豊卦の象辭に日中すれど昃、月盈れど食、天地盈虚時と消息す云々、史記の龜策傳の補に、物安ぞ全かるべけん、天も尚全からず、故に世に屋を爲るに、三の瓦を欠て棟にす、これ天に應ずる也、天下しなぐ\ある物、全からずして生ず、と見ゆ、周の鼎穴ありて水を滿しめず、滿れど缺ることわりにて、全美の器物は、天のにくみを受る事也、文政十二年三月廿一日己ノ中刻に、外神田佐久間町一丁目より火起りて、神田川を隔たる内神田に移て、柳橋、濱町、靈岸島、築地、佃島、八町堀、新橋にいたり、本町、石町、日本橋、鍛冶

橋、数寄屋橋わたりまで、千五町焼失せり、その中に或侯家の邸に、平常目途などして、用心堅固の土藏廿七宇、残らず焼失す、大傳馬町二丁目の小津といへる商賈の土藏、金三千両の費にて造たるも焼失し、卅間堀手の字といへる木商が、四千両の費にて造れる土藏も焼失せり、又ひとゝせ日本橋通り三丁目の焼たるをり、油商が数千金を費して造れる土藏焼失し、近隣の鼠の喰損じたる古土藏、とまへをも立ざりしが残りたりき、美服は人の指さしうらやむ思あり、高名の人は神のにくみにあふ、思ふべし、愼むべし、又なくて叶はぬ器と、無用の器との差別あり、これを知て貯へもし、省もせざらんは、鴨の足の短に繼ぎ、鶴の足の長きを斷ことわりにて、合期せざる所爲といふべし、たとへば劍術を知らずして政宗の太刀を求得たりとも何の用かある、讀ことと能はずして倭漢の珍書を秘藏せりとも何の日か用を爲ん、これ無用の器物を虚く設ることわり也、また劍術者流にして刀劍を帶せざる學者にして書籍を藏せざるは、共に有用の器を缺くる不覺の振舞也、廓隆智藏が腹を日に曝したるは、愚人を欺く謾行也、淮南子に、弋を好者は繳矰を具へ、魚を好者は罟罘を具ふべし、未其具無して其利を得事なし、といへり。

榮名

小山田與淸

凡人身を受たるものは、榮名をもて本意とし、美稱を當今後世に揚でやは有べき、宗五大草紙に、

名と利との二は、いづれも人のねがふ事なれども、利は一旦の利也、名は萬代の名也、武士一命を捨るも、名を思ふ故也、といへり、名利の爲に、人をも世をも欺きて、自榮華にほこるとも、天と神とは欺くべからず、無量壽經に、神明記識して、犯者を赦さず、と見ゆ、一たび無常の風たろひ來れど、妻子眷屬も從事あたはず、勇力才智も施すに術なく、獨路泉にさまよふらんをりにいたり、再び世にかへりて、榮名を揚んと悔思とも、かひあらんや、曹操、が治世の奸賊亂世の英雄と稱し、桓温が、芳を後世に流すこと能はずとも、臭を萬歲に遺すに足ざらんや、といへる、共に惡人の意なれど、耳に聞べきにあらず、史記の游俠傳に、人榮名をもて飾表とすれど、稱譽極なし、といへり、宗五大草紙に又、富貴の家に、いたづらに寶を貯へ、人に施さざらんは、思出もなき事なるべし、妻子珍寶及王位とて、死ぬる時は、我妻も子も寶も位も一として身にそはず、只人の爲、世の爲に辛苦し、身に相當ほど、ぶんわいに從て、德を訟人にほどこし、受たる恩を忘べからず、吾身の爲に、ほしいまゝに人をなやまし、用ある時は人になれ親しみ、用なき時は人に不沙汰不實の振舞するは、當時のならひなれど、口惜き事のよしいひたるは、深切の敎訓なりかし、

妻は半身上

小山田與清

俗言に女房は半身上といへり、されど妻は全生計也、妻善れど、家榮ゆ、妻惡れど家衰ふ、詩に、

關雎を始とし、孝經に、閨門章を重とし、禮に婚義を本とせり、漢書の匡衡が傳に、福の興は、皇家に本づかざるなく、道の衰るは、梱内に始らざることなしと、見ゆ、源氏物語の、雨夜の品定にも、天の下の政にもまさりて、かたきわざは、家政にて、妻によるよしいへり、されど、妻をさして、家あるじともいふは、夫は、奉公に暇なくて、家の事は、妻に打任すれど、質に家を守る主は、妻也、齊の桓公も、衛姫を夫人とし、管仲を仲父として、霸業を成せり、妻にも、品あれど、一つらには、ろんじがたし、中の品より上の事は、しばらくいはず、下の品にも、又、品々なる中にしかるべき武家などの妻は、柔和貞節は勿論也、手かき、物縫ひ、髮結ひわざを、緊要とす、琴は

無用に似たれど、今の世にて、いにしへの、糸竹に、なずらふべきは、これのみなれど、いと深く、たどらずとも、さゝ耳かたは、ならざらんばかりは、あらまほし、をりにふれて調子だに、さゝしらず、顔打あかめて片より居たらんは、爪くはるゝわざなるべし、歌の道も、腰折だにものせざらんは、いかにぞや、いといやしきゝはみの妻は物ぬひ、髮結ひ食もの調じ出るはさら也、紡績溜物などほど〳〵に、つけたる、手わざして、活計を營むべし、今裏店住の者の妻を見るに、夫が家業に出し後にては、小兒を負もし抱もし集りて遊びたはぶれ、或は、買喰ひ、さま〴〵の、よからぬふるまひに、日をくらし、夫が辛じて得てかへれる錢をまちとりて、好みぐひなどするは、にく

むべき風俗也、越後の國にては、ツグラといふものに、小兒を納れ家にもおき、田野にもゐて行て婦女等、紡績、織、縫、農業を勤しむといへり、そは江戸にて、飯鉢入といふ物のごとく、藁すべ、又は、綿さいでなど敷て小兒の居心よきやうにせし器也、其製法は、彼國人に問べし、此は小兒を安處せしむる無上の器なれど、都下裏店住の貧民にも敎へて小兒を此のツグラ中に安處しめ婦女女工をつとめて、夫の力を助くべく名主屋主に嚴令を布せまほしきわざ也、ツグラは、關東にては曲物やうの器にいへど、もと土座の義にて、小兒　田野に將て行しをり、此内に居らしむるゆゑの名なり、散木集、藤原、俊頼の歌に、山がつの津ぐらにゐたる我なれや心せどさをなげくと思へど、とよめるにても、いと狹少なる座具の事ときこゆ、又大藏卿行宗、集、歌に、山里のさくりのうへに尻かけてをしねこぐ間に雨ぞ降來る、異本にさくりを、つくらに作れり、さくりは今もさくといふ畠を鍬もて條々に決り分て、うね立たる所也、さくを切などもいふめり、つぐらは、土座にて、さくに尻かけたるを然もいへる也、座とは、すべて物を居置處にいふ詞也、此歌によりて小兒を居しむるツグラも、もと、土座の義なることをしり曲物などやうの物にツグラといふは、其形の近きによれるゆゑなるを知べし、

久留米かすり

わたひ低くて、品柄よく、しかも、色のさむるこ

となきは、久留めがすりにしくものなからむ。今や、久留米がすりの名聲、はるかに、りうきう、さつまの上にいでゝ、一年におりいだすこと、三十万反、そのあたひ四十六万圓にいたる。まことに盛なること哉。

大河のながれ滔々たるも、その源は、岩まもり木の葉くゞる小流におこる。久留米絣今日の盛大は、じつに、一少女が苦心經營の結果にいでこしなり。寛政十一二年の頃、筑後國御井郡久留米通外町に、井上でんといひて年十二三ばかりの少女あり。この少女、をさなき頃より女工をこのみ、常に、ひとりして、師につくこともなくて、機織のことうまず勉めけるが、この頃になりて、試に斷餘の白糸をあつめ、その數ヶ處を括りて藍汁にひたし、さて、とりいでて紮糸をとりのけ、そをもて物を織りしかば、白き紋、そゝこと散りぼひて、誠に奇觀なりければ、人々めでいつくしみて、これを、雪ふりとも、霰織ともいへりしが、やがて、久留米縦横絣のはじめなり。でん、これより、意を一にして、かすりを織るに、十五六のころになりては、技いよゝすぐれ、弟子二十人にあまれり。のち四十歳のころ、久留米の市中に、この絣をおるもの、ほとほと四百人、みな、でんがをしへ子のみなりしといふ。されど、縦横絣を、また、おでん絣ともいへりとなん。でん、明治二年四月廿六日に死ぬ。行年八十二。

嗚呼、一少女が經營、今、かくまで盛大の結果をきたし、一地方の産業となれり。その德はいな

りといふべし、婦人少女も、また、つとめずして可らむや。

入谷の朝顔

ちわき

上野の岡のひがしにわたりて、入谷といふ里あり。としぐゝいへごとに、朝がほをうゑて、露のひぬまの榮華をきほふと、きくこと久しけれど、さはることありて、いつの夏も、あだにすごしゝに、このごろ、あさいの夢をおどろかして、いざ見にゆかむと、そそのかす者あるより、つれだちて行いて見るに、げに、きゝしにもまさりて、やなみに、うすく濃く、さまざまの色にさきにほへるは、目もさ



むるぞかりになむ。されど、はや日たけたれど、なかぞは、こはれろめたるは、ひと村雨のともいはまほしくて、あかずくちをし。

　ゆふづくひいりやの里をわれゆけど
　　やなみにつゞく朝がほのはな
　おく露のひぬまをまたぬあさがほは
　　何をたよりに日ごと咲くらむ

お伽ばなし（三）

須賀の屋主人

かための嫁をとりしはなし

なにがしといふ博士ありけり。ある女の、こゝろざしやさしく、行たゞしきよしをきゝつたへて、姿などかいま見ることもなくて、仲だつ人をたのみて迎へぬ。こゝのたびの土器めぐりをはり、高砂のうた、めでたうたひをさめて、さて、嫁ごのぞうしをとりのくれど、こはいかに。かためなりけり。あまりのことに、博士もあきされてこぞしは口もふさがらず。やがて、

　ふためづゝあはせてよめと思ひしを
　　これはひとめのはづかしき哉

と誦じぬれど、よめもとりあへず、

　みめよきはをひとの身にぞふためなる
　　つまころ家のかためなりけれ

とかへしたり。博士、いとけうがりて、げに〳〵といひて睦しく過したりとなん。

可憐孃

中尾鶯夢

（一）旅路の好奇心つゞき

いさゝかの晩酌に、淡醉を催して、心の奥より湧き出づる愉快を、千鳥足に浮ばせ、蹌踉蹣跚、斑なる藁舍の軒、あるは生垣の邊など、縫ひつゝ歩みて、村端を左に曲れば、並木の松雨後の雫を滴らし、瓜先に轉がる砂礫の、苔鮮らしく滑らかなり。はるか彼方に、一軒の茶屋とも思ぼしきが、色怪しげに染りたる、一流の旗、夕風に靡かせたる風情、いとも密かなる。朦朧たる瞳を凝して、旗の文字を讀み試せば、日陰の茶屋とぞ書かれける。道にゆかしき心地のせられ、裳裾の濡るゝをも厭はで、露を宿せる芝生を踏みしだき、やがて軒近くなる牀几に、腰を懸くれば。ひねもす日光に曝して、色憔け煤けたる顔の老嫗、穢しき皺あらはし、皺手を揉みながら、輕薄なる追從、胸惡き程の世辭、頻りに並べ立てられ。よくも耳傾けず、煩はしさ儘に、沖の方を見遣れば。夕立に不意の襲撃を蒙りて、怒りたらん浪の、潮を吐くさま物凄く、暮靄に罩まれ、翠嵐濃き島の根岸を、嚙み碎き、洗ひ去るなど、望眺殊に面白きに。頭重げなる渺雲の斷片、飛ぶが如く往き通ふ間を、洩れて映ずる夕陽、紅霓を畫きて飽き足らず、梢の露に珠を宿し、漣漪に浮びて碎かる等、得も言ひ難き好風景。心に醉重ねて、側目も振らず恍惚れたりしが。れ茶ひとつ召せと、皺枯れし聲に驚ろかされ、ふりかへりて、穢なき縁缺茶碗手に把

り、ばん茶に咽喉を潤せば、其味の美さ香ばしさ、今一杯給はれと、所望する折しも。濕りて重き空氣を破り、鏗々たる無常の鐘の音響き渡りぬ。さては入相告ぐるにやあらんと思ひしに、又も續きて早拍子の鉦の、亂れ打なる音起りぬ。訝しと不審の眉黎むれば、流れも清き小川を隔てゝ、三々伍々鹽烟を揚ぐる苫屋の、透き間〳〵に、見えつ隱れつ行き過ぐる、白き何どもわかぬ一列。俄かに心動かされて、そを見さだめんと思ふ好奇心の、むら〳〵と萌せしかば。蟇口開きて白銅一つ、盆の上に投げつゝ、老嫗の言葉を背に聞き流し、とつかは歩を川岸近く移したり。

(二)　佳話の端緒

磯と磯との間を流るゝ小川は、幅わづかに五六間にもたらで、飛べば一跨ぎと思はるゝに、甲斐の國にありと聞く、猿渡しに似合はしき、船の綱渡しこそあれ。そは此方と彼方の堤下なる汀に、太く逞ましき杭の立てられ、十重廿重に縒りたる麻綱二筋、その中間を繋ぎて、小舟の楫手は、綱を曳きつゝ舟をやるなりけり。ちと好奇らしければ、處柄とて、いとも風流に見受られける。われは唯一人の舟出を望みたるに。楫手の、今少し俟ち給ひね、乘合の者の來るべければと、苛ふけしきもあらぬを、酒手はいか程にても、取らすべければ、とくこの舟を遣らずや、とわざと憤怒の聲を絞れば。海邊の者の正直なる、いたく怖れし風情にて、急ぎ舟を操り始めたり。流れを横斷ることとて、右に左に動搖激しきも、また興をぞ添へにける。

間もなく、渚に繁き蘆押わけ、舟は杭の横手へ着きけれど、酒手を與へ、砂原に上るに、蟹、船虫等の、人の跫音を、我事と驚きて逃げ行くも、可愛らし。やがて、鉦の音を慕ひ行きしが、磯邊を緣とりしが如き、漫々たる一帶の畷道に出でたりき。曩きに怪訝の念を懷きたる白き行列は、徐々數町の前へ練り來れり。われはその葬式の列なりしを悟りて、今更緣起わるき想に沈み、かつは好奇のあまり、態々川越の見物とは、蒼惶てしことの、われながら可笑しくも、又馬鹿氣たりと思ひしが。田舍の埋葬式を知り置くも、强ち無益にはあらじと、思ひなほして、畷道より一二間、小松原を搔分け、年老りたる松株に尻を据ゑぬ。

鉦の音はますゝゝ近づきて、歪き列はわらはに、一步々々密かに見渡されぬ。色淺黑き結束髷爺の、紺の被衣、股引に、柿色の細帶を緊め、殊勝氣に鉦うちて、嚮導なせる。跡に、あつぱれ善智識の名僧、古びたる錦襴の袈裟裕かに懸け、水晶の念珠爪繰りつゝ步めり。柩は白綾子の棺衣もて蔽はれ。嚮導と同じ扮裝の寺男二人、前後に肩を入れ、擔ぎ行く。次ぎは死人の妹にもやあらん、十三四歲ばかりなる少女の、死別の悲歎に熱き涙を注ぎたる瞼、腫れ赤みて、戒名保つ手も戰慄きけるは、側の見る目も痛はしきに。質朴なる村人の送葬せる扮裝の、垢染みたる木綿の單物を着、尻裂草履を穿きて、埃塗れの脚に、砂烟を蹴あげもなせ、皆まことと、この死人に憐れを催し、口裡幽かに阿彌陀佛の讀經、涙

を頰に傳はせるさへ多く交らひて、淚强きわれも、何となくうら悲しき心地せられ、久しく見送る事も、堪へかねたるに、遠きより來れる、暮色の蒼然たるにも驚きつ、急ぎ家路を辿りて、漸く旅宿に戻りけり。

昨夜の就寢あしくて、たゞ死人の身上にのみ、種種樣々と臆測を畫きて、夢にまで、年尙は若き美人の、病の床より死に奪ひ去らるゝ際、われの顏を怨めしげに眺めしを、認めたりしが。五臟の疲勞激しかりけん、またも拂曉近く、一番鷄の塒離るゝ頃、瞼を閉ぢしが。起き出づれど、いまだ十時過なり。いかにも好奇心の消え失せで、又も磯邊を傳ひ、川を渡りて、いと嚴めしき門傾き廂破れたる、古伽藍の側を通りて、寂莫しき墓場に臻りぬ。

椿、山茶花の生垣に回はれたる、墓場の西南隅、森上りたる土饅頭あり、新らしき卒塔婆の前に、淸水湛へし茶碗を置き、左右に立てる紙樒、葉樒の、いとも哀れを添へにける。これぞ新佛の塚なりと、見るからに淚の迸りて、去むし合掌讀經に跽坐き、不圖仰向れど、卒塔婆の文字怪しげに、妙精信女と讀まれける。さてはまだ未婚者にてありつるよ、憐れ不愍と、いとゞ心根を痛めける。久しくも居るべき處ならねど、旅宿に還りて、早卒亭主を呼び出し、澁茶の興に、憐れなる少女の物語を、詳しく聽きぬ。いでや、號を追ひ、可憐なる少女を描いて、讀者が同情の淚を灑がれんを俟つ。

花ふゞき

塩井雨江

その十九

思はじとすれど、昔のまゝなる巖の色、水の光りの、宛ながら呼ぶがごとく、もの云ふが如くおぼゆるに、張りさくまでも、固く怺へたる賤機が胸中の萬感も、はや怺らへもやうもあらず、たゞへたる戀しさ、なつかしさ、悲しさ、惜しさの、一度に、小やかなる胸壁をうちやぶりし、溢れいでては、あやも物もわかずなりて、湧きかへる涙しどけなく、父が最期遂けたる巖に抱きすがりて、よゝとばかりに泣きふしたるが、巖にわたる水の音は、斷乎として屈せず。何處ともなく、こや賤機、未練ぞ、不甲斐なきぞ、賤機。父は泣けとは敎へざりしぞ、遺さゞりしぞ、賤機。あまりに未練なるぞ、不甲斐ぞや。武文は、父を慕へ、父を忘るな、父をかなしめとて、子は有たぬぞ。汝は育てざりしぞ、賤機。さては、無念ぞと、父武文が頻りに焦つ如き聲の、何處ともなく、きこゆるが如くおぼゆるに、賤機は、あな容るさせ給へ、父上。未練は侍らず。泣きも侍らずと、袖を掃つて、立ち上りては、最早一滴の涙もとゞめず。悲しさも戀しさも、忘れたるごとく、冲をうちながめて、綠波の間をくゞる白帆の影の、三ッ四ッ五ッ、水鳥の飛ぶにも似たり、おもしろの氣色やと、うち笑みての獨言。姫はさ云ふ汝れが心の中、おもふにつけても、猶更に哀れと、手を取りて泣き





給ふ。

とゞむれども〳〵、涙にくれ給ふ姫を、やうやくに勵まし奉る折柄、三郎が郎黨は、しかるべき旅館を定め、御息所の御輿をも整へ、舁り來りければ、いざとて、すゝめて、御輿に乘せ奉りて、海岸を進む折から、五人六人りの、伴人引具したる武士風の者にあひたり。

彼の武士は、行違ひざま、賤機と面をあはせ、痛く驚きたるけしきにて、俄に二足三足路を避け、急ぎて行き過ぎむとしたるを、賤機は何れもひけむ、ゐなやといひざま、蹈らぬばかりに、つッと寄りて、彼方の男の太刀の尻をば、むづとばかりに引きつかみたり。彼方も、きつとふりむきて、あな何奴なれば、奇怪な。無言にて、武士が魂魄の太刀尻摑むとは、おのれ狼藉千萬の女子かな。不禮なすなと、睨めつくるを、機賤はものともせず、はゝとうち笑ひて、やは忘れたるか、五郎。去年尼ケ崎の長者の館に討ち入りて、調度を掠め、姫上をも奪はむとしたる汝が不禮狼藉、忘れはすまじ、覺ねつらむ、汝ゆゑに、かしこくもいとはしき御息所が、草莽の間に、幾多の辛酸。汝ゆゑに、またなき父を、口惜くも、藻介の遂りの水泡と、きやしたる怨み、世をかへても、報はではやまずおもひたる我一念、なほ此の世にして、しかも此の所にして、汝に廻り逢ふこそ、天神地祇のわれを導き、わが志を遂げさせ給ふものならめ。いかに、五郎、感念して、わが成敗をうけよと、父が無念をこめて遺したる短刀、拔き放ちて、其

所動くな、五郎と、踊り込みたり。

あはや、五郎。唯一突につきふせられけんと見れど、彼も流石に曲者なり。ひらりと身をかはして、賤機が短刀に、空をつかせ、小癪な女、ものものしやと威丈け高になりて、面倒ながら、呼びかけられては、うちも捨てがたし。あたら花を、むざむながら、所望ならば、怨みは無からむと、三尺八寸の大太刀、振りかざして、只一打と、うち下す刄の下をかひくゞりて、賤機が是非に突かむと、なほも頻りにつけ入る有樣は、奔雲疾風、影あると見せて、此處に無く、影なしと見せて、其處に在り、あるがごとく無きがごとく、彼方にあらはれ、此方にかくれ、見るも目盲む非常の早業に、五郎、唯あなや／＼と焦つのみ。全身朱を注ぎたるごとく、眞赤になり、必至となりて鬪へど、はや太刀も五体も、しどろもどろ。賤機のうち込む短刀を、二度までも受け損じて、眉間に二手まで負ひたる傷より、血汐の、兩の眼へ流れ込むものから、眼さへ既に明ならず。唯強情の曲者が、力にまかせて、盲打に振り廻す大太刀、なか／＼に手強く見ゆ。

されど、賤機は隙を伺ひ、難なく五郎が太刀持つ手を、礑と一打ち打ち落し、なほ一歩いらだちて、返へす短刀に、脇腹を、したゝかに、柄もとまで突きたる痛手に、たぢ／＼と、よろめきかゝるに、つけ入りて、太股を、又一打ち打ちたるに、何かは堪ふべき、五郎は、うんとばかりに仆れて、起きもえあがらず。

賤機は、靜かにうちまもりて、いかに五郎、不孝不忠不義の五郎、汝いかばかり爭ふとも、いまは我成敗を逃るへからず。懸るも、梟すも、捨るも、我等が心のまゝにあり。さりながら、聞けや、五郎。さきつ秋、汝が不法の狼藉ゆゑに、心ならずも、思はざる淡路の孤村に漂流して、危く藻屑の末の泡となるべかりしを、忝くも、汝が父母なる老夫婦に、再生の惠を承け、舟をさへ惠ぐまれて、志す所へも送られたる恩義は、遂に忘れがたく思ふなり。汝が大罪は、げに八裂にすとも、棄市するも、なほ容し難きものにしあれど、汝、誠に先非を悔ひ、心より潔く我成敗を受けて、怨みなくば、親らたちも、いつまで怨みむ。さても、又汝が不孝不忠不義の罪を正したるのみにては、汝が淡路の老父母の、かくばかり情ありける恩義に對して、親らが恩義を報ひたりといふ能はず。われつく〴〵思ふ所あり。いかにぞや、五郎。誠に潔く汝成敗を受け、先非を負ふの心あらば、汝が不孝の罪は、汝が父母に代りて、親らが容るさむ。汝が不忠の罪は、君に奏して、親らが容るし得させむ。汝が不義の罪は、我快く怨みを解かむ。いかにぞや、五郎といへば、五郎は、起きもえ上らぬ痛手を、辛うじて起き直り、脇なる小刀拔くと見るまに、我とわが胸へ突き立たる覺悟、さすがにしほらしや。

賤機は、つく〴〵とうちまもりて、あはれ五郎、覺悟の心底、見えたるぞ、さては、汝が罪も、最早消えたり、汝が所領松浦一面は、奏して必ず汝が

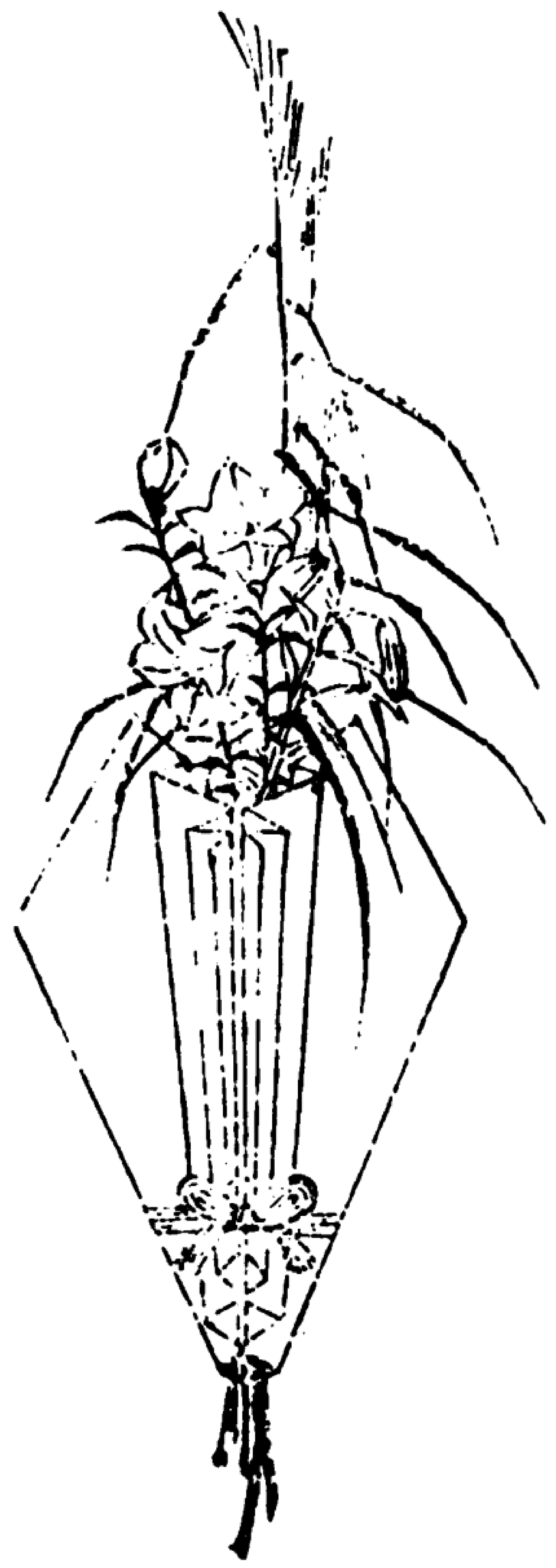
父母に賜はらむ。此を冥土の土産として、心な殘しろ、五郎といふを、きくと共に、莞爾とうち笑み、御息所の御輿の方を、三度拜して、小太刀を抜くとともに、息絶ゑたる最期の振舞、人は誠に性善の者ならむ。

七郎は、五郎の伴れたる野武士づれの、諸共に賤機討たんと斬り込みたるを、避りたゝかひ、四人までも打殺し、二人三人り逃ぐるを、にがさじと、四五町も追ひすがりたるが、此の時引返し來て、賤機がために悦びきこゆれど、有井の郎黨に倶せられ、遠くさけ給ひたる御息所も、御輿をよさせられ、賤機が情ある振舞を、いたく譽めたゞへ給ふ。夫れよりは、又途中のさはりなく、主從四人り、都へ恙なくつきて、堀河の御所に、宮御息所の御對面、越し方は、

げに夢、

行末は、

又如何なる夢ならむ。



文林

夏雲　高崎正風

さみだれははれむとすらし足引の
山見えそめつくものたえまに

郭公幽　諏訪忠元

ほとゝぎす人傳よりはまされども
あまりほのかになき渡るなり

月前水雞　仝

澄わたる月にうかれてじむ〴〵も
わがしむの戸をとふ水雞かな

深夜螢　小出粲

呉竹の夜つゆしたゝるおとのして
ふけたる庭にとぶほたるかな

遠村夕立　小出粲

松かさきこずゑの夕日かげきえぬ
ゆふたちすらし山はゞのさと

雛　遠山英一

まきし餌に交る小鳥をにはとりの
連れたるひなと思ひけるかな

徑夏草　阪正臣

風のゆく道のみ見えてなつくさに
わけいりがたくなれる野べ哉

朝早苗　大口鯛二

垣つ田は日かけまつまに植はてつ
朝ころものははかどりにけれ

曉水雞　千葉胤明

にはとりもまだ鳴出ぬあかつきに

たゝきれこすは水雞なりけり

田家夏月　岩崎　勝從

うゑはてし田面の早苗つゆみねて
すゞしく出るやまのはのつき

禁庭橘　三輪　義方

九重のみはしに馴れてたちはなは
常世のものとも覺ねざりけり

新竹　仝

すゞしさは風にとのみも思ひけり
あめもよろしき庭のわかたけ

谷埋木　曲澤　貞恒

世にいてんときこそまため谷底の
なとうもれ木の埋れはつべき

納涼　宇野　豐道

立よればわきていづみの涼しさに
あつさもしらぬ諏訪の山かげ

浦夏月　仝

はす網もまだとりいれず夏の夜の
月におこたるうらのあまひと

勾當內侍　佐々　豐水

賜はりし玉のさかづきたまよりも
君かこゝろのひかりうるはし

夕水雞　永石　德文

わりなくもたゝく水雞か夕まくれ
まださしあへぬ柴のあみ戸を

惟喬親王　菊池　眞浴

揚るべきくもゐの春をよそにみて
小野の山邊になくひばりかな

業平朝臣　　仝

ふみ分し君のなさけにくらぶれは
　猶ふかゝらぬ小野のしらゆき

夏露　　近衛　貞子

夏草のしげるまゝなるわがやどは
　日かげにきえぬ露もありけり

水雞　　三條　章子

とふ人もなき柴の戸をゆふべ／＼
　水雞ぞかりぞたゝきなれたる

風前螢　　柳原　愛子

ともし火を風にけちたる窓になは
　殘るひかりはほたるなりけり

小督局　　税所　敦子

わたし野のさがのゝ露に埋もれて
　いよ／＼たかし松むしのこゑ

窓前螢　　保科　寧子

あつめけん昔のかげもしのはれて
　文よむまどにとふほたるかな

百合　　小池　道子

夏草のしげみがなかにまじれども
　やつれざりけり姫ゆりのはな

竹亭夏月　　北島いと子

わく露のひかりもそひて夏の夜の
　月かげすゞしたけのしたいは

庭梅雨　　河村　重子

池の魚も流れいつべくなりにけり
　日をふる庭のさみだれのあめ

夕顔　　小川　直子

われはてし伏屋ののきもゆふ顔の
花にれもてをおこしけるかな

常磐　鶴　久子
今はとて降り積む雪にをれたるや
子もたる松のみさをなるらん

をりにふれて　遠山いね子
日のかげる方のみ人のゆきかひて
なつは大ぢもせむくなりけり

海邊夕立　河野　文子
雲きはひろらもとゞろにはたゝ神
なるとの沖をすぐるゆうだち

五月雨　田澤翠香子
月は今くものいつこぞさみだれの
はるゝひまなきゆふぐれの空

野夏草

三輪義方

村雨の名殘、猶打曇りて、風いと涼しきに、衣をれたりし、野邊の草も、生出でたるやうにて、いと心ちよげなり、葉ごとに、露のすがりたるも、いとをかしけれど、たゞに見捨てがたう、あるかなきかに、殘れる路を、たどりゆくに、名も知らぬ草どもの中に、萩女郎花などの、花はまだしきも、枝のさまなど、猶ことくさには似ず、いとなまめかしき、さまして、打まじれるも又をかし、そこはかとなく、なつかしき香の、打するは、藤袴の、まだ咲いでぬも、打枝葉の、雨にうるほひて、匂ふなるべし、すゝき苅萱など、淺茅にまじれるも、猶さまことに、みなわかる、ものむづか

しげに、はひわたれる、眞葛さへ、葉裏の白く、秋風に恨みんさまも、かねて覺て、いとあはれなり、かくて、心ざす方も、なきものから、わけわけ行けむ、しげみかくれに、生ひたる荻の、まだ風をもやどさぬが、袖に打ふれて、そよろとこたへたる、いはんかたなくて、

樋口大尉の圖を見て思ふことを

在伊勢　山川子

手は等しく手なるべきを、右手にはいかなる不動かひそむらむ。左手には如何なる菩薩か宿るらむ。支那四百餘州を蹂躪せむずる鐵石心も乳兒一人の力には及はざりけむ。怒ばゞ鬼神も怖れぬべく笑はゞ稚子もなづきぬべし。げにゆかしきは日本男子の心根なりけり。

乳兒は救ひ上げられて嬉しくやおぼえけむ。雪よりも白き頬には無量の愛を湛へ血塩よりも赤き口びるには無限の情を漲らし。何とも知らぬげにはほゑみつゝ紅葉の如き手して大尉の髭鬚を弄ぶさまこの乳兒の心にはいかなる安樂の神の宿るらむと思ふに大尉は惻隱の情とゞめあへず。片手に劍光片手に乳兒日にさらされて一しは炎々たる眸子は憤怒のほむらに燃えて一點の間隙なく散り行く敵をにらまへながら一視同仁の心を以て濕みたる眼瞼は愛着のきづなにほだされて露むかりもまじろかず。上衣に包める乳兒に注げり。生死の際にも吾を忘れていたはるさま獅子のその子を育むもかくやと覺えて無言に進みゆく兵士も思はす顏を

そむけたり。

あはれいとほしのちごや。かなしのをさなごや。吾子は如何なれば斯る痛はしき所には捨られし。顔ばせの賤しからぬは由緒あるもの丶子なるべしこの稚子の父は吾兵力を支へかねて逃げ去りしにやありけむ。親を慕ひてちゝよとこがるゝ蓑虫さへあるものを之は又聞くだに怖しき脩羅の衢に取のこされ鬼をもあざむく大尉にいだかれてはゝゑむとはそもいかなるすぐせにか。人の性は固善なりと聞くものを吾子も父の子なればとてわごの心の初めよりやはきたなかるべき吾子はこゝを救はれて人となりなむ行末如何になり行らむ。物の善し悪しきゝわけむ日は昔のめぐみ心にきざみて記しや置べき。はた猶親の子の親に似て援はれし人を仇とやすべき。迷ふ時は眞如の月も鬼魅と疑はれ信ずるときは水底の月影も明玉とまがへらる。」

げに憐むべきは清國の現狀なりけり。百尺崖所の白き雪一點の塵にまみれず數百年の前までは山の如き仁者水の如き智者位に在りて鳳とび麟あそびたらましを今日は見る限りとびちりたる血潮にけがされて雪の色も雪と見えず清かりし昔の姿を誠にもあらぬ唐紅に染めなしゝも自業とやいはむ。神は順逆の道をこゝに示して世のことわりの爭ふべからざるをさとさせ玉へり。文を左にし武を右にせる吾か大御國は支那をあはれむ心こそあれ。いかで彼をにくしと思ふ事のあるべき。傲慢不遜なる清人これに鑑みて悟る所なくば天誅矢を反すよりも速ならむ。

雜報

●皇后陛下の行啓　皇后陛下には、いにし六日午後御出門、青山御所へ行啓あらせられたり。

●小松宮妃殿下の御諭旨　いにし三日、小松宮殿下御息所には、赤十字社へ臨御あらせされ、第三分院看護婦へ令旨を下し給へり。その令旨

本日此席に列なる篤志看護婦人會員はじめ本社及各支部の看護婦諸氏が陸軍豫備病院第三分院の勤務に從事し心を協へ力を戮せ能く其職を盡したるいさほしは第一師團軍醫部長菊池醫監の賜られたる厚き謝辭を受るに至りていよ〳〵其光をましたるものといふべく本社報國恤兵の主旨を貫き得たるは深くよみしかつよろこびに堪へざる所なり今や諸氏か救護の主務をとかれ故郷に歸へる其のしろきいろの看護衣はにしきをきたるよりも猶まさりて榮ゐあるべし諸氏ますます忠愛慈善の心を篤うし邦家のため盡すところあらんことを望む

●從軍の徽章　今回出征の軍人軍屬一般に配與せらるべき從軍徽章は、參謀本部にて雛形三種を製して、畏き邊に捧呈したるに、何れも御意に叶はせられず、畏くも更に親しく意匠御案出あらせられし由にて、其は楕圓形の銅地に、神功皇后三韓征伐の古事より來りし意匠の彫刻あるものなりとぞ承はる。尚は右は來る九月末頃までに悉皆調製を了りて、一般に御下賜の運に至るべしといふ。

●義眼義手義足　皇后陛下の大御惠の露、あきしまのやまとの内のみか、唐くにのしこ草にまでたきわたし給へるなんかしこき戰後、義眼手足製作のみめぐみを蒙りつる軍人六十餘名に及べるが、この内清兵のとりことなりて赤十字社の治療

を受けつるもの、八人ありと、さて、このもの造りろなはらむまだ附ざる前の形とつけて後の形とを寫眞にとりて、みもとに奉らるべきよしにきく、

秋月新太郎

秋月新太郎氏（女子高等師範學校々長）の女子教育につきて述べられたる意見を得たれば左に其要點をぬきとりてかゝげたり、

●女子教育管見

一、我國女子教育の實況

人を教育するには

平等調和の發達を期すべしとは現時學者一般の定論にして是れ獨り人々個々の教育に止まらず凡て進歩發達を要するものは此論の外に出づること能はず一國の開進も一社會の發達も又事々物々の進歩も平等調和を失ふときは決して十全の域に到達すること能はざるなり、故に余輩の從事する教育に於ても益之か進歩發達を望まむ愈其平等調和を謀るへきは最も注意すへきの點なり、而して我國

今日の教育界に於て

最も調和を敗り權衡を失へるものは男子教育と女子教育との關係なるへし

二十六年帝國文部省年報によれば

全國學齡兒童の數は

男三百八十五萬五千四百九十九名
女三百四十萬七千七百三名
計七百二十六萬三千二百二名にして
其中就學者は四百二十六萬五千五百九十名あり故

に學齢兒童百名中就學者の比例は五十八名七分三厘に當り又其男女の區別を擧くれは

　男は

百名中七十四名七分六厘

　女は

百名中四十名五分九厘なり

進みて尋常中學校生徒數と之に對する高等女學校生徒數とを對比すれは二十六年に在りて

　尋常中學校生徒の總數は

一萬九千五百六十三名

卒業生千二百十八名あり高等女學校生徒の數は

三千二十名

卒業生六百五十九名なり

　尋常師範學校は總數四十七校の中女子部を設くるもの僅かに二十餘校あり

其生徒は五千七百十九名にして

内男四千九百十七名

女八百二十名

卒業生は男九百二十五名

女二百五十一名なり

右擧くる所の統計により」

　女子は男子に比すれは

就學者の數大に少く全体に取りては男子の半數に充たず且つ敎育の度進むに從ひて其數愈減するを見るへし又女子の中等敎育即ち高等女學校女子技藝學校等の敎育を受くるもの少きのみならず此の如き女子　中等敎育を施すべき設備大に乏しきを知るべし試に男子の就學すべき尋常中學校を擧くれむ其數官公私立を合せて七十四校あり尚昨今に至りて其數を增し今後續々新設を見るべき有様な

れは一兩年中には各地に通じて其數益多きを加ふべし之に對する高等女學校は總數二十八校に過ぎず而して他に高等女學校の名稱を有せずして女子に中等教育を授くる所のもの多少之あるべしと雖も此等は却て

基督教家の設立

に係り或は直接間接に基督教家に關係あるもの多數を占むるの狀態なり此等基督教主義の女學校は熱心以て生徒を教へ懇切以て之を導き女子教育の爲に盡す所甚た大なれど敢て之を排斥すべきにあらされとも未た我國の國体風俗慣習氣風等に適應せざる所あり特に女子中等教育の統一調和を缺くの憂なしとせず

國家の望むべき

高等女學校たらさるなり」

吾人の女子に對して

期望する所の標準を

擧け以て今日の女子之に適するや否やの判斷を乞はんとす

男女の世に處するや各公私の職掌ありて其分を盡すべき事は男女共に一樣なれども男女の職分は自ら其趣を異にし形式上稍相同じからざるものなり而して女子に望む所の節操義務は淑女たり良妻たり又賢母たるに外ならず

淑女

とは徳義正しく志操高く言語擧止優しく父母に孝養を盡し兄弟姉妹の間殊に愛憐の情深く朋友に交りて信義を重し世上普通の學術に通し交際の道を

辨へ身体の保全を尊び服装閑雅清素毫も粗暴輕擧の風なく驕奢華美の姿なく直接には一家の爲に働き間接には國家の用をなすべきものなるべし」

良妻

とは淑女の美徳を備へ人の妻となりて後夫に對して貞節を重じ舅姑に事へて柔順を主とし夫の兄弟姉妹に接すること血屬に於けるが如くし家を治むるには其家の分限に應じて節儉を旨とし衣食住の事は一身に引受け婢僕の取扱居室の清潔物品の整頓親戚朋友の交際何れも其宜を得事を爲すには時限を定めて遲滯なからしめ難に當りては徒に狼狽せずして失体なからしめ常に家内の和睦を保ち何事も夫を輔佐してまた内顧の憂なからしむへきものなるべし

賢母

とは既に良妻となりて子を擧くれば朝夕其養育に心を盡し衣服飮食居室運動の事其當を得教訓の事恩愛威儼宜に適ひ善性深く根ざして又惡癖の萌芽なく更に長じては相當の教育を受けしめ以て淳良賢明國家有爲の材を得るものなるへし」

現に行はるゝ女子教育に於ても教育の本旨を失するもの多く甚しきは昔日の陋習を墨守して移らず教育を以て逸樂歡遊の具となし文弱淫蕩の弊を醸すものあり或は歐米の皮相を學びて知識の啓發に偏僻して唯輕佻浮薄の誹を招くものあり未だ以て國家自然の歴史本邦女子の特性風俗習慣等を考へ眞成の學理を窮めて女子教育の基礎を定むるもの殆と之あるなし故に女子

に教育を施すは女子本來の職分を盡さしむるに非ずして單に漠然の擧に出つるあり雷同に由るあり又漫に多少の學藝を誇るにあり或は以て配偶を得るに便するにありと云ふべきなり

明治維新の後學政發布と共に始て男女等しく教育を受けしむゝの時に際し且つ泰西女流の風儀に刺衝せられ從來女子は無學無識の霧中に彷徨せるを救濟せんとするに專らなるより女子教育稍盛に起り單に知識を啓發し思想を開拓することゝなれり而して其教育を受けたる女子の狀態を以て昔日の女子に比較するときは活潑有爲なるものゝ如しと雖も其徳操性行は却て修らず或は流れて輕躁浮薄となり淑女たり良妻たり又賢母たるの實を擧くるもの極て稀なり

是に於てか女子教育の方針一轉して徳育の點に傾き又体育の主張に移らんとす此の如く教育の方針變ずるに當りては其都度衰頽不振を招き最初より今日に至るまで間斷なく順序よき發達を得たるものにあらざるなり此の如く常に女子教育の基礎確立せず時々盛ならんとして弊害續きて起り再三挫折の難を蒙むれるなり是亦女子教育不振の一原因なるへし」

人民一般に

在りても女子教育の必要を感ずること深からず且つ生計の度歐米諸國に比すれば稍低きを免かれずして昔日に比して教育費高き今日の學校は女子を入るゝに躊躇するの傾向あり政府も亦女子教育を

看ること男子教育の厚きに及ぼす高等女學校に關する規程の如きも漸く昨今之を發令せるの有樣なり即ち政府人民又教育者共に女子教育を顧みること稍冷淡にして特に女子の爲適切なる設備を缺き今や女子は中等教育を受くるに其處極て少き事實を呈せるなり此の如きは亦女子教育の盛大を致す能はさるの原因と云はざる可らず」

女子教育の必要

女子を教育するは

國民教育の基礎を造くるの洪範あり其理を一言せん聖賢胎教の訓孟母三遷の例は勿論内外古今に渉りて凡て人間社會に家庭教育の緊要なる其勢力の重大なることは誰かまた之を信せさるものあらん既に家庭教育を以て此の如く重要なるものとせは女子教育を以て最も必要なるものとすべきは信じて疑はざる所なり何となれば家庭教育の本尊は父にあらず夫にあらず主として賢母良妻に在りて存すれはなり賢母良妻果して家庭教育の本尊とならは斯の本尊を得ること固より人間社會即ち其一團體なる國家の希望にして此希望を達するの途は夫れ唯女子教育に在るのみ故に將來益有爲なる我國民を得んには其國民を養育するに適する母を作らざる可からず即ち

女子は家庭教育の本尊

にして國民教育の基礎を造くるものと云ふべきなり

且つ女子に教育を施すは國民教育の基礎を正くするに止まらず又大に

國民一般の道徳を進捗するの利益

ものにして一國一鄕或は一社會たるを問はず其團体の道徳の高卑は其團体に於ける女子の品性の高卑に係ることは吾人とも知る所なり然らは則ち我國民の道徳を進捗せんと欲せば女子に敎育を施すより大なる利は他に之あらざるべし況や女子をして淑女たり良妻たり又賢母たるの本分を盡さしむるに於ては敎育の外豈に他あらんや

將來の女子敎育

前數節に内外女子敎育の實况を述べ我國女子敎育不振の原因を擧け女子敎育の必要を論じたれば玆に將來の女子敎育如何を說くべきの順序となれり然れども今說かんとする所は前諸節を併せ観るときは其意自ら了解するに苦しまさるへし故に今は唯將來女子敎育如何の梗概に止め且つ女子敎育振作法の一端に止めんとす

我國將來の女子敎育は之を約言すれば前節の必要に應ずる敎育を施すべしと云ふに在り然れども女子敎育の研究未た發達せざる今日に於ては人々其說を異にし第一に緊要なる女子敎育の理想或は方針定まらず且つ實際に至りては普及上進の程度學業の種類敎育各部の輕重、特別留意の條件等に關する意見區々たるは免かれざる所なり

今余輩の所見を略述すれば

女子敎育は前に述べし如く女子をして淑女良妻賢母たるの實を盡さしむるに外ならず

然れども昔日の淑女たり良妻たり又賢母たるもの

必すしも今日の淑女良妻賢母たること能はず是れ社會進歩の異なりて今日の日本は昔日の日本にあらざれはなり然り而して女子教育大体の目的は此の如しと雖も人に上下貧富の差あり國民四千萬の半數に當れる女子をして悉く同一の教育を受けしむるか如きは到底能はさる所なり故に

小學教育に在りては女子と雖も男子と差別を附することなく偏に小學教則大綱に従ひて教育を施し中等教育は中産以上の女子には必す之を施し高等専門の教育に至りては之を他日に譲り唯之を防遏せざらんことに止むべし

中等教育は自ら普通の高等女學校の教科と技藝専修科の教科との二種に分るへし技藝専修科は成るべく中産以下の女子にも廣く之を及ぼし以て直接には自家獨立の資を與へ間接には國家富強の道を開かんことを務むるを要す而して現時此等の女子に中等教育を施すべき設備大に缺乏せるを以て小學就學の奨勵と共に益之か開設を務めさるを得す

既往現在の状况に照し

試に女子教育上特に留意すへき事項を擧くれは左の如し

一　女子に世界思想を養成せしむる事

一　女子をして自ら同胞四千萬の半數を占むる國民たるの觀念を鞏固にせしむる事

一　女子をして自ら家政に任ずるは天職な

りと雖も女子たるの本分は獨り之に止まらず國家維持の幾分を擔當するに在ることを悟らしむる事

一　家庭に在りて子女を養育する女子に於ても善良有爲なる國民を敎育するの念を固く抱かしむる事

爰に於て

女子敎育振作法の一端を述へ以て本論を結ばんとす上の好む所下之より甚しきものありとは誠に適切の語なるが如しされば女子敎育の事に於ても上政府の奬勵によりて之を盛ならしめ其監督によりて之を動かさゞらしむるは最も採るへきの方法なるべし

又學理と實際とにより女子敎育の基礎を確立し益之を研究改良するの任に當るへき善良なる敎育家を造り又女子の性に適應する多數の女敎員を養成すべし是れ外形の設備假令完きも精神たる敎育者其人を得ざれば隆盛期すべからざればなり況や未だ設備不完全なる今日に於てをや

（終）

●地震のはやさ　去る明治廿四年十月二十八日、岐阜にて六時三十七分十一秒にゆすりし地震は、一分と四秒のちに大坂までゆき、二分の後には東京までとゞきたり、かくの如きことを多くあつめて數ふるときは地震は一秒時間に七千六百二十尺はしるとぞ、又一度地がゆするときは少くも四百尺多きは一萬六千尺ほど、はゞにて波がうつ如くゆすりゆくとぞ（同上一三五ー一四一、大森

房吉氏報告)

●ランプ　それのみにても恐ろしき地震、かてて加へて火事となること多し、そのもとをたづぬれどランプより起る、地震安全ランプを用ゐてつねぐ\用心すべきなり、麻生繁生氏の安全ランプ手がるにて、且、最用心よしとなり(同上八〇)

●地震につぶれやすき家　は、地形のしかた悪しきものと、枘穴をあけて柱の折れやすくなりたるものと屋根の重すぎたるものなる由、又、梁などの繼ぎかたのあしきもの、柱と小屋との取りつけかたのあしきもの、通し貫にて柱をかためたるものなどもつぶれやすしとぞ、又楔にて柱などをかためおきたるものは地震にこの楔ぬけやすくして、つぶるゝ事ありといふ、(震災豫防調査報告第三卷、一〇七一一三〇、中村達太郎、曾禰達藏氏報告による)家をつくりたまはん人々よ、深くこころしたまへ、

●東京府高等女學校　此の學校は、明治廿一年十二月二十八日、東京府令第七十二號を以て、京橋區南小田原町に設置せられ、大束重善氏校長の任に當り、翌廿二年一月より開校の準備を爲し、四月一日より授業を始めたり。されど、初め東京府の本校を設立せんと企てし時は、一は府下の女子に高等の普通學科を學修せしめ、一は小學女教員を養成せんため、地方税を以て經費を支辨する所の府立學校と爲さんとの計畫なりしが、當時の府會は之を否決して、其の經費の支出を拒みしにより、最初より此の事に盡力せし大束氏等、大に之

を歎き、有志と共に經費を負擔すべく定め、府廳へ其の監督を出願し、始て本校は創立せられしなり。故に本校は、名は府立なれども、其の經費は毫も官府の補助を仰がず、全く生徒の授業料と、有志者の寄附金とを以て、今日に維持し來れるなり、此く經費の不十分なるのみならず、府會の否決したるにも關はらず、世人は大に望みを本校に屬し、他の各女學校の、何れも衰微を極むる中に、ひとり本校のみは、年毎に盛んにして、遂に今日の好評を受くるに至りしもの、これ決して偶然の事にはあらざるべし。今本校の事につき聞き得たる事どもを左に記す。

本校の修業年限は、もと三年なりしが、東京府尋常師範學校には、女子部の設けなきにより、其の欠を補はんがため、卒業生にして、小學敎員志望者のために、師範科を置き、敎員に必須なる學科を、三四ヶ月間學修せしめ、女敎員を養成して、以て府下は更なり、各地方小學敎員の欠乏を補ひ來れり、本校創立以來師範科を卒業し、敎員免狀を得て、現に敎員に從事するもの百五十五人なるを以ても、本校の、普通敎育上如何ほどの功を、世に顯はしゝかを知りぬべし。

然るに本年四月よりは、本年一月發の文部省令第壹號に基き、規則を改め、本科の修業年限を四ヶ年として、高等小學第三年級より、直ちに本校に連續する事を得せしめ、又師範科を補習科と改め、敎員及び保姆志願の者にして、本科卒業後補習科に入らんとするものは、最初より學業優等、品行

端正、身體壯健なる者に限る事とし、一層學力を高め、又學修期限を滿六ヶ月と定めたれど、今後は、一層完全なる良教員保姆を出すべし、然のみならず、本校は他の高等女學校より、學科の程度や〻高くして、高等女子師範學校へ入學せんとする者の、豫備學科を修むるに適當せるを以て、年年本校より同校の入學試驗を受けて、及第するもの亦少からず、然らば、本校は一校にして、高等女學校と、尋常女子師範學校と、高等女子師範學校豫備校との事業を兼ねたるものなれど、其の修學上便利の多き事、他に類なしといふ。

今の校長は東京府參事官谷口留五郎氏、教務は、專ら首座教諭岩谷英太郎氏擔任し、其の他、教諭、助教諭、囑托教員等職員總て十三人にして、現在生徒の数は二百五十餘人なり。

されども、本年四月よりは大に規模を擴めて生徒の定員を三百人としたれど、なほ五十人計りの欠員あるにより、來九月初旬即ち第二學期の初には更に生徒を募集する筈なりといふ。

入學料　金壹圓

授業料　第一年級は一ヶ月に付金壹圓

第二年級已上は金壹圓五十錢

補習科は金貳圓

●女子師範學校の養蠶　福島縣尋常師範學校にては、昨年中、試に女子部生徒に、養蠶實習を爲さしめたりしに、頗る好成績を得たりしかど、本年も亦この實習を行へりといふ、その概略は、五月六日に掃立して、五月廿日に盡く上簇せり、其

蛾量は七匁八分にて、品種は新撰及び青熟の二種にて、蠶種は昨年この校にて製造せしを用たり、掃立より上簇に至るまて、要給桑量は、五百〇九貫百二十五匁にして、絲繭一石三斗五升、同切繭一斗四升五合、汚繭七升、薄繭一斗五升の收獲あり、蠶室は女子部寄宿舍の一部を以て之に充て、三十六名の生徒を、六分して六組とし、各受持を定め、三眠起に至る迄は、學科授業の前後に、生徒に自ら摘桑をも爲さしめたり、桑葉は同校農業練習場内にあるものを使用せり、且飼育に關する法則、蠶兒の解剖、繭の鑑定法、蠶種の鑑別、蠶種製造にかゝる說明をもなしゝに、生徒は皆喜びてきけり、なは將來好成蹟をみる望ありとなり、これ敎育界に一生面を拓きたる擧といひつべし、

●東京女學館の卒業證書授與式　去十二日虎の門なる同館に於て行へり來會者は朝野貴顯、學生の親戚、新聞記者等一百餘名にて先づ同館長辻新次氏の演說あり次に卒業生五名へ證書を授與し次に同館評議員長土方久元氏の祝辭、生徒總代の答辭其他生徒の國文朗讀、英文諳誦、洋琴連獨彈、唱歌等ありしといふ

●大木伯の敎育談　『國各國粹あり依て以て獨立の實を全ふす而るに奇激枉て世界主義を我邦に應用せんとす其の誤想たる辨を要せずして明なり之を受けて吸々する者亦愚と云ふべし學術は無論世界主義ならざるべからざるも敎育の眞髓たる道義は飽くまで國躰を本位となさゞるべからず然らざれば其國遂に亡びなん』

●台北の一日本婦人　日本軍の台北府に進み入りたりし時誰云ふとなく當府に日本婦人ありとの説ありしかど物數奇にも種々探偵を試みたる人も多かりしにこれは同府に住める獨逸商館手代某の外妾なりしと云ふ外妾ときゝては興さめて爪彈もしつべき心地するをもし他の事業の爲にありしならんには如何にうれしかりしならんを

●女教師の歎（八十七號の續）

京にいでゝ後、志としは、紹介する人のあるにまかせて、ろこゝと、名だゝる女史などいふ人々をたづねて、時勢を談し、女權を論ひ、また、英語會、廢娼會などいふにもまじらひて、何となう、をかしき月日をおくりしうち、やうく歐風ふきやみしかど、さながら野分のあとの如くに、目に見るもの、すべて、あはれに寂しく覺ゆ、あまつさへ、新聞雜誌は、女學生の醜聞をのみかきならべ、世の人は、女の書生といへど、蛇蝎のごとくに忌みきらひぬれど、廣き天地のあひだに、この身をおく處なくて、やむを得ず、國もとの知事に撰擧を乞ひ、さる高等の學校にはいりぬ。

おなじ學の窓もとに、よりつどひたる友どちを見やるに、いづれ劣らぬ蓮葉のみにて、さながら、秋のなかどころに、不忍の池を見わたすごとくなれど、われにも似たる人のなきことよと、心ひろかに、をかしく思ひて、かつ、淺しといふこと心づき、これよりは、心を志づめ行をつゝしみて、學の業をはげめど、四年の月日も、いつとなう春秋と過ぎて、いよゝ、學年のをはりとなり、

おなじ級第一の成績をもて、ことなう、卒業の證をえたり。

まだ、學の窓にありしほどの、友どちが希望はさまぐ＼にて、（まだ、この女教師、をり＼は、會話に英語をまじふる癖のこれり）いづれも、はかなき空想の影をおうて、あるは、文學者を夫として、塵の世にうとき里に、風雅たる家をしつらひて、閑靜に住みなし、朝には、相たづさへて野の逍遥に、みるとん、ばいろん、などの詩を誦じ、夕には、夕顔棚の下すゞみに、すこつと、おうづおうすの文を評し、また、相ともに筆を文壇にはしらせて、當世をおどろかさむなど、ろゞろなるねがひをするものあれど、あるは、大政事家に嫁きて、女子參政權をえたる曉には、手をとりあひて議場にのぼり、天下の大事を論はむとのぞむもあり、また勅任官をむこにして、黒塗馬車にあひのりて、夜會、舞蹈の席をまはらむと期するもあれど、誰とて、生涯を教育のわざにゆだねて、やもめぐらしに果さむと思ふものはあらざりき。

われも、また、兎やかく心にねがふこと、望むところはかりき。されど、ろは、今は、いふも恥しく、かたるもおもぶせなり。

われらが望は、いづれも、みな、鏡にさうだんせぬ上のことなれど、卒業のあかつきには、玉帛をろなへて、學者紳士の、嫁に妻にと迎へんもの、大幣の引手あまたならむと頼みしわればれは、うたかたのはかなく消えて、空だのみと何とかは、はづれやすきものとさとりぬ。

いまさら、節を折りて、判任官などの妻とならんもくやしく、さりとて、わが望むところは、かなたより望まねど、思ふこと、行く水にかずかくよりもはかなく、三階の格子ろとより、演劇を見るにもまして、もどかしけれど、せむ方なければ、遂には、まけじ魂より、なまなか、歎果なき男心をたよりに、あぢきなき世をおくらむより、むしろ、やもめにて、生涯を教育にゆだねんころよからめと、心をさだめぬ。

かくて、ある女學校の教師となりしに、こゝは、おほく、貴族富豪の孃たちをあつめて教育する處なれど、生徒のわがまゝはげしきに、かてゝくはへて、嫉妬の心つよきこといはむ方なし。たとへど、試驗の點數に甲乙をつくれど、劣りたるは、勝りたる方をにくみて、いさかひを起し、あるは、教師の偏頗などさだするにより、せむかたなくて、席の上下を、背の高低にてさだめ、點數を、をのれの、自のはかに知らしめぬやになせども、なほ、とやかくと爭あり。試驗に、成績わるしとて落第さすれど、ろが家の家扶、家令、番頭などいふもの尋ねきて、物をまひなひ、引きあげを乞ふ。きけど、他の生徒にいまれ、聞かねど、親の威、財の力をもて、われにあだす。よろめには、綺羅びかに、起居動作ゑとやかにて、優しき生徒と見ゆれど、われには、さながら、ま綿もて包みたる針の席にすわる心地して、淺ましとも、つらしとも、いはん語なし。をりく、泣きて爭ふ子あり。なにごとゝひろかに質せど、衣服のよしあし、俳優

の評よりいひつのりて、果は、泣きあひてあらろうなりといふに、われもあきれて、わが若きをりの蓮葉とことかはり、はや、十四五にして、艶めきたることをいふもの哉と、えだしは口もふさからず。

われ、身に墨染の衣をまとはず。手に珠數をつまぐらねども、わが身や、なにの尼にまさりたるところかある。あはれ、われとて、木にもあらず。石にもあらぬ身なれど、秋の夜の寢覺の床に、つまこふ鹿のなく音をきゝては、(これは上野動物園の鹿の音なるべし)などか、いたづら臥のつれづれを感ぜざるべき。空しく涙に、枕をうかせしこともえど〱なり。嗚呼〱、われは、はかなき空想に、またく、身をあやまり、不孝の子となれり。(といひて、さめぐ〱と泣く)

されど、今さら、敢果なきことを悔むとも、せむ方なけれど、いよ〱、學の道をはげまむと、さる才學德行の令聞たかき女史の家に、妹をつれて身をよせぬ。あな〱、こゝも、また魔窟なり。(未完)

●音樂學校卒業證書授與式　いにし六日午后三時より、高等師範學校の附屬なる東京音樂學校にては、第八回卒業證書授與式を行はれたり。いま式場の順序を記るさんに、まづ主事上原六四郎氏には、本學年間の學事報告をなし、つぎに校長嘉納治五郎氏證書を授與して式言をのべ、また文部大臣にかはりて、秘書官小山健三氏祝辭を、卒業生總代高橋たみ謝辭をよみ、次に唱歌、風琴、バイオリン、獨唱歌、洋琴等數番の演奏あり、式の全く畢

はれるは六時なりき。いま女子の卒業生、文部大臣の祝辭ならびに生徒總代高橋たみ子の謝辭を左に掲げぬ、

高等師範學校附屬音樂學校にては去る六日卒業證書授與式擧行せられたり卒業生の姓名は左の如し（但し男子は省略す）

専修部卒業生

岐阜縣平民　高橋たみ子

靜岡縣平民　倠山みね子

福島縣士族　戸城やす子

師範部卒業生

靜岡縣平民　大塚おと子

西園寺文部大臣祝辭

音樂を以て教化を裨補するは、古今東西の共に同じき所にして、國民の性情を調和し、風を移し俗を易ふるの道、之に過ぐるものなし、文明の歩を進むるに從ひ、益々其用の廣く且つ大なるを見る。本校創設以來、日尚は淺しと雖も、内外の音樂を參酌考定し、獨り之を校内の生徒に授くるのみならず、偏く全國の學校に施設し、其進歩頗る觀るべきものあり。茲に第八回卒業式に當り、本大臣は諸子か光榮ある卒業證書を受領するを見て、欣躍に堪へず、益々其學を修したる技藝を練磨し、之を家庭に學校に施し、以て我教化を裨補せんことを望む、

卒業生徒總代高橋たみ謝辭

答辭

千早振、神の御代より、つぎ〳〵に、久方の、天

の下しろしめす、代々の帝の神遊を始として、空蟬の今の世はなほさら、かきはなす人ごとしげく、入日さす西洋のことまでくはへ音樂の學びの家さへ設けさせ給ひ、人のふみ行くべき五の道をもとゐとし、氣高きふしを歌ひつも、またかなでつるわざをしも學ばせ、ゆくさき世のためをしへのたすけとなし給ふ、これかけまくも畏きわが大君の、開けゆく世のさまをれもはしめせる御惠ぞかし、われらも此御惠の露にもれず、此學校に入りしは、まだきのふけふとおもひしに、秋の紅葉春の花行く水のはや行き過ぎて、ことしふみ月のけふしも、此おごそかなるむしろにつらなり、つかさ人たちのまへにて、嬉しくも學の業の卒たるしるしふみを給はり、そ

がうへに文部のおとゞをはじめ奉り、校長のきみ師の君たちより御言の葉の光りさへさしそへ給へるころ、いみじけれ、こはひとへに校長のきみをはじめ師の君たちの、あつきみいつくしみのたまものによりてなりけり、あはれみ空に聳ゆる富士の嶺よりも高く、底ひ知られぬわたつ海よりもふかき、此御惠のほど、いづれの時にか忘るべき、今より後朝の露のうつろひやすく、夕の雲の定めなき世に出でゝは、たゞ一すぢに畏き　勅語の御むねにしたがひ、ながき年月導かせ給ひける、師の君の御をしへをしるべにて力の及ばむ限り、心のいたらむきはみ、皇國の爲に盡し、深き御恩の萬が一をだも、報はむやとおもひさだめつる一ふしを述べて女の身

のゐやなきわざなれど今日の正式のいなみがたく同じ學の人々にかはりてこゝに謝し奉るになむ

●滋賀縣の高等女學校　滋賀縣、彥根、町立女學校を、高等女學校に更へんの議、さきごろ認可を得たれは、いにし一日ろの開校式を行へり。式に列れる來賓は數十名にて、校長勅語を捧讀し、町長以下二三の祝詞演說あり、了りて茶菓の饗應などありしといふ。

◎特例金圓下賜　德島縣の井原はると云ふ者去月十一日德行卓絕の廉を以て賞勳局より金圓を下賜せられしよし其書附は左の如し

德島縣阿波國那賀郡桑野村朝田梅之助母

井原はる

資性孝貞克く婦道を竭す夫淸三郎素行修らず家產日に落つ數々諫れども聽かず反て之を待つ婢の如く勞瘁萬狀毫も怨色なく孜々として職を治め業を務む幾もなくして夫の逐ふ所と爲り姑も亦去て親戚に寄食す即ち母家に歸り節を守りて移らず日々賃役を執り自ら飮食を減じて僅に得る所を蓄へ以て姑の嗜好物を購ひ私に之を饋り定省して承歡甚だ懃む後ち姑の病に臥すや奉養扶掖側を離ず其死するや號哭悲哀鄉人をして感動せしむ既にして夫法に坐して刑に抵り落魄飢寒且つ惡疾に嬰るを聞き怛惕措く能はす人家を賃して之を迎へ湯藥看護具に意を盡すも遂に起たざるに至り厚く葬祭を行ひ爾後勤苦一家を經紀し子女を撫育する等志操を渝へざること

十有五年洵に奇特とす仍て爲其賞金貳拾五圓
下賜候事

●第八回尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員檢定試驗問題(つゞき)

地理科問題

○地誌

一 四國島の地勢に就きて知れる所を記述せよ

二 本邦陸軍兵の配置を記載せよ

三 本邦の商業に就きて知れる所を記述せよ

四 ハワイ群島の特產物は何々なりや

五 シベリアの三大河とは何々なりや幷せて其の重要なる支流を記述せよ

六 世界に於て石油を最も多く產出する地方二三を擧げよ

七 左の都邑の所在地生業等其の他特記すべきものを列擧せ

甲 重慶
乙 マドリッド Madrid
丙 サンチアゴ Santiago
丁 ケープタウン Cape Town
戊 全州
己 ボムベイ Bombay
庚 宗關
辛 リオデヂアネイロ Rio de Jaeniro
壬 マンチエズター Manchester
癸 メルボルン Melbourne

地文學教員檢定問題

○設問五題

一 地球上晝夜の長短を生ずる原因は如何又た赤道と北極圏と南極に於ける晝夜の長短の變化を詳述すべし

二 大氣の溫度に變化を生ずる原因を列記し之を說明せよ

三 深き海底に於ける溫度、沈澱物、生物其他の狀態を說明せよ

四 地球表面の凹凸に變遷を生ぜしむる者は何なりや一一之を說明せよ

五 日本の氣候は土地に因て種々の點に著るしき差異あり之を比較して述べよ

地文教授法

學生を率て高山の溪間に入れば地文學上如何なる諸點に注目せしめ且つ如何なる順序に之を說明するや

歷史科問題

○本邦史問題

一 奈良時代平安時代に於ける僧侶の宗教以外の事業の主なる

ものを云へ

二　室町時代の中葉より織豐時代に至るまでの間に於ける皇室尊崇の事蹟の主なるものを擧げよ

三　左の人々の事蹟を簡單に述べよ

甲　御諸別王
乙　大藏種材
丙　二階堂是圓
丁　多賀高忠
戊　間宮林藏

四　左の事柄を簡單に說明せよ

甲　柵戸、防人、衛士、大番
乙　八虐六議
丙　兩六波羅の職權
丁　椀飯振舞
戊　寛政異學の禁

○支那史問題

五　西漢より唐に至る佛教興隆の狀を述べよ

六　唐の太宗高宗の世及び元初五代の間に征服したる諸國の名を擧げよ

七　左の事項を簡單に說明せよ

甲　封禪
乙　魏晉の九品中正
丙　唐の藩鎭の起原
丁　南宋僞學の禁
戊　清初三藩の叛

八　左の人々の顯著なる事蹟を簡單に述べよ

甲　慕容垂
乙　陸贄
丙　周惇頤
丁　于謙
戊　睿親王多爾袞

○萬國史問題

一　ギリシアの歷史とローマの歷史とに於ける異同の點を辨せよ

二　西ローマ分裂して現出したる邦國は何々なりや

三　ブラジル國獨立の始末を記せよ

四　左の地名に關聯せる顯著なる歷史事實を簡單に述べよ

甲　オルミユイツ　Olmutz
乙　キエフ　Kiev
丙　ノヷラ　Novara
丁　子ースビイ　Naseby
戊　グラナダ　Granada
己　バグダツド　Bagdad

五　左の人々の顯著なる事蹟を簡單に述べよ

甲　ヤン　フス　Jan(John)Huss

乙　タキツス　Tacitus

丙　チユランヌ　Turenne

丁　サア　ヘンリイ　ローリンソン　Sir Henry Rawlinson

戊　ペトラルカ　Petrarcha (Petrach)

己　アレクサンデル　フオン　フムボールト　Aloxander von Humbold

○教授法問題（筆記口答とも同問題の事）

（一）普通教育に於て外國歴史を授くる心得

（二）左の問題の一つを擇べ

（甲）平相國の事蹟を述べたる後要點の説明

（乙）諸葛亮の事蹟を述べたる後要點の説明

（丙）英國女皇エリザベスの事蹟を述べたる後要點の説明

○物理學設問　午前

第一問　一秒につき一千尺の速度を以て抛ちたる彈丸をして地平線に於ける最大の距離に達せしめんには砲身を地平線と四十五度の角度を爲さしむ可きことを證明せよ又其距離に達するには幾何の時間を要するや

但し空氣の摩擦と兩度の差により生ずる地球引力の差違は算入するに及ばず

第二問　水平線上の二定點A及びB（其距離一、三五尺）より細き糸二本を垂れ、Bに着けたる糸（長さ七、三寸）をしてAに着けたる糸の一端にある輪輸内を通過せしめ其端に重り若干を懸く、糸の釣り合ひて靜止すべき位置を問ふ

但し輪の重さと糸の摩擦及び重さは算入するに及ばず

第三問　「ヤング」の率(Young's Modulus)とは如何、又之を測定する方法を問ふ

第四問　氷を製造する法如何、又其理由を詳説せよ

第五問　色消し「レンス」(Achromatic Lens)の構造及び理を説明せよ

第六問　大氣中に於ける音響の速度は其壓力の大小に關係なき理由如何

第七問　二十四個の電池あり其内部の抵抗は各々二「オーム」なり今外部の抵抗十二「オーム」なるとき最大の電流を得んとするには如何に之を排列す可きや、又其理由を問ふ

第八問　電流計あり其抵抗を a とし之に通ずる電流を b 分の一に減ずるには何程の抵抗の近道(Shunt)を用ゐ可きや

第九問　何なか電池の分極(Polarization)といふ、又其理を述へよ

○物理學設問　午後

第一問　一樣なる密度を有する物質にて作れる半球あり其截面を上にして水平面上に置き其重さを a とし其重心は面上 h の距離にありとし其截面の周圍の一點より p なる重りを懸

くるときは其靜止する位置如何

第二問　何をか慣性の能率(Moment of Inertia)といふ、又圓板あり其中心を通過し其面に垂直なる軸に對する慣性の能率を計算せよ

第三問　「オスモース」(Osmose)の現象を記述せよ

第四問　飽和せざる蒸氣(Nonsaturated or Superheated Vapour)の壓力及び溫度を變ずるときに起る變化を記述せよ、又何をか露點(Dew Point)と云ふ

第五問　六分儀(Sextant)の構造と理を說明せよ

第六問　「ホウ井トストン」橋(Wheatstone's Bridge)の理論を問ふ

○化學科設問

一　硅素、燐、硫黄、及び鹽素の週期律に於ける關係を單体及び重なる酸化物、水酸化物、鹽化物、及水素化合物に就きて論述せよ

二　鹽化「ソヂユム」と硫酸「マグネシユム」を當滴量の割合を以て混じ水溶液となして之を(い)熱して蒸發することと(ろ)通常の溫度に於て蒸發するときと其結果の差異如何又之に關する說明如何

三　炭酸は酸化炭素に比すれば同一量の炭素に對し二倍の酸素を含有す此事實を示すべき容量的實驗を記述すべし

四　膽礬より第一鹽化銅を製する方法を說明すべし膽礬一〇〇瓦より幾何瓦の第一鹽化銅を得べきか

五　鹽化「クロミル」(CrO_2Cl_2)の製法及性質如何又其成生によりて鹽化物を驗出する方如何

六　「クロム」鐵鑛より重「クロム」酸「ポッタシユム」の製法及同類の主なる用途を記し併せて其用ひは如何なる化學作用に基くかを說明すべし

七　「エチル、アルコホル」より「ノルマル」及「イソ」兩種の「プロピル、アルコホル」を得る方如何化學式を用ひて其變化を說明すべし

八　「エーテル」の化學的性質及其製法の化學變化如何

九　木材の乾溜成生物より純粹の木酢及木精を製する方如何

十　「ベンジン」を石炭酸に變ずる方法石炭酸の性質、反應、及用途如何

以上十題とす

(未完)

父母のかしらかきなでさきかれと
いひしことはぞ忘れかねつる

教の庭

七月廿日兼題　夕立　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　長野縣東筑摩郡鹽尻村　河野文子

山の端に入日のかけはさしなから
　裾野すき行くゆふたちのあめ

地　三河國寶飯郡睦美村大字牧野　丸山須磨子

涼しさを草葉のつゆに殘しおきて
　あとなく晴るゝ夕たちのそら

人　長野縣長野町八百四番內一　吉田芳

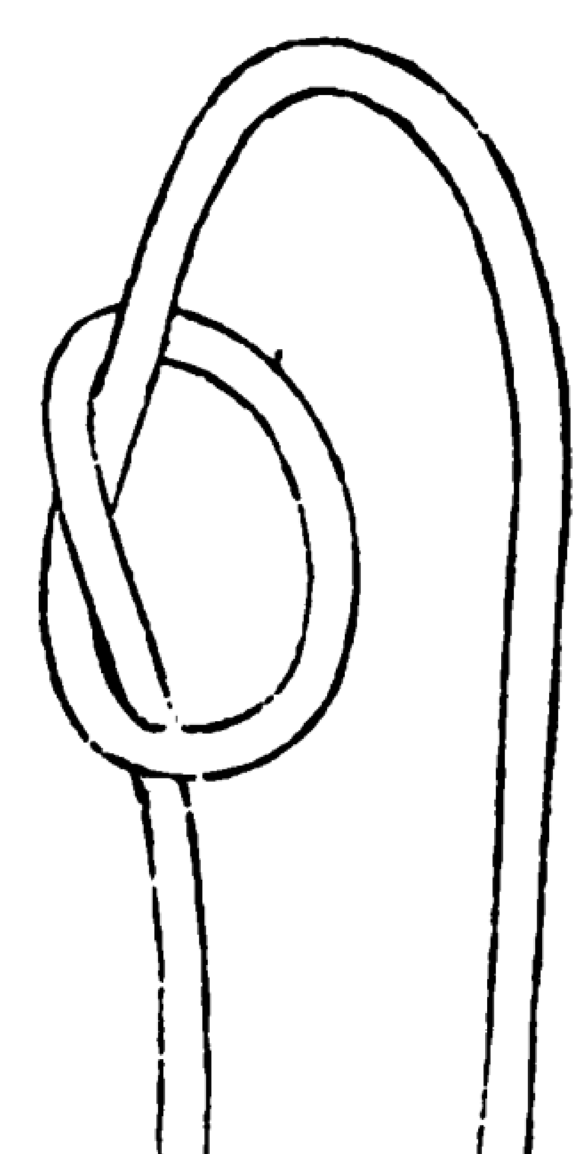
たちさわく雲の行手もわかぬまに
　はやくもはるゝ夕たちのあめ

夕立のふるかまに〱日のもとの
　めくみになひく唐くにのはら　安井章子

暗の夜の瀧の音すこきそれならて
　ふるあとしけき夕たちのあめ　住山幾子

わかやとのそのゝ新竹けふこそは
　夕たち降りてすゝしかりけれ　新開みちを

たちよりし松のこすゑになく蟬の
　こゑよりはるゝ夕たちのあめ　羽田みゑ子



（其一）

見るかうちに八重の村雲立さわき
　はけしくおろす夕たちのあめ　梶井久子

あかねさす日も入方とかたふきて
　いとゝすゝしき夕たちのあめ　名取正代子

雲はやみいろくとすれと夏の野に
　ふりかゝりたり夕たちのあめ　吾妻ちか子

鳴神のおとすさましきゆふたちに
　夏のあつさもなかしつるかな　山本いと子

かきくもるほところなけれ音羽山　諸井くら子

こすゑなひきて夕たちそする

立よらんかけしなけれは夏ころも　伊賀なを子
この夕たちにぬれつゝそゆく

遠方のたかねに見えしうきくもの　杉浦いと子
かゝるもはやき夕たちのあめ

風はやみそらゆく雲のいつしかに　舘脇ます子
よそにすき行く夕たちのあめ

なる神の音もはけしきゆふたちに　池谷菊子
夏をわするゝかせのすゝしさ

なる神の音もはけしきゆふたちの　大谷津琴子
のちこそいと涼しかりけれ

賤の男か水あらそひのはけしきを　毛受重子
ふりしつめたり小田の夕たち

ときのまに八重の山々ふり越えて　道廣八重子
ふもとの里をすくるゆふたち

入日さす垣ねの草もつゆをおひて　佐治ふさ子
涼しさそはるゆふたちのあと

夕立のけしきの杜はあめはれて　小野田のふ子
日のかけ暑くなりにけるかな

晴れしかとおもへはくるゝ夕立の　中原貞子
すきて涼しきにはのおもかな

水くまりの神のすさひか劇しくも　宇野勳子
河せをわたるゆふたちのあめ

山のはにかゝると見えて谷かはの　宇野富子
水になかるゝゆふたちのくも

夏ふかき暑さあらひぬゆふたちの　宇多田揚子
ふるの軒端におつるたきつせ

かきくもり風もさはひて一しきり　井出信子
あれてはすくる夕たちのあめ

夕立のそらもとゝろに鳴りわたり　大谷友子
暑さをあらふそてのすゝしさ

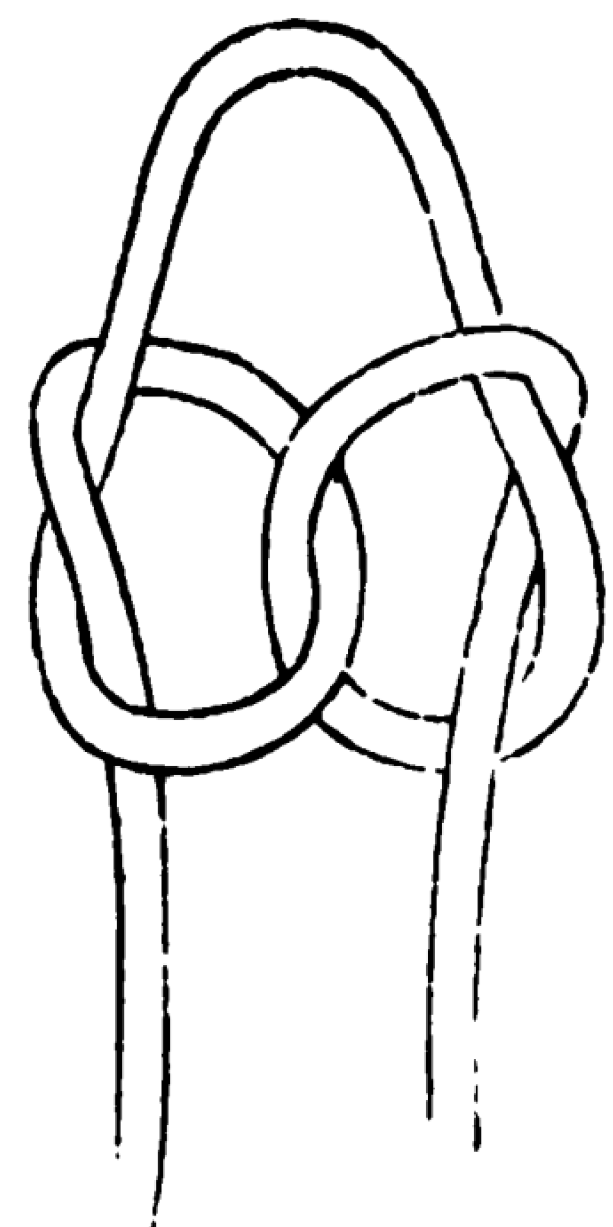
夕立のあめはふりきぬいかつちの　花山やすゑ
音すさましくそらにきこえて

暑さをは洗ひすてつとおはゆれは　花山みさ子
ふる夕たちのあめそうれしき

にはかにも風すさましくさわく也　澤田春子
一むらすくるゆふたちのあめ

さらしおきしつか汗衣取〳〵に　佐々有鄰子

雲さわく末野ははれてゆふたちの　徳永万壽子
かゝるさところ涼しかりけれ
あらひなかせる夕たちのあめ



（其二）

うたゝねの夢もやふれて夕たちの　田中りん子
すきゆくあところ涼しかりける

ゆあみする心地やすらん草も木も　瀬戸　榮子
みどり色ますゆふたちのあめ

峯遠く雲かゝりぬと見しほとに　植木　鋼子
やかてふりくるゆふ立のあめ

見るか内にやかてふりくる夕立に　碓井　信子
衣ぬらさしとさわくしつのめ

天つ日はなほてりなから夕たちの　碓井　武子
過しあところすゝしかりけれ

物すこくけしきをかへてなる神の　碓井和歌子
あしとくすくる夕たちのあめ

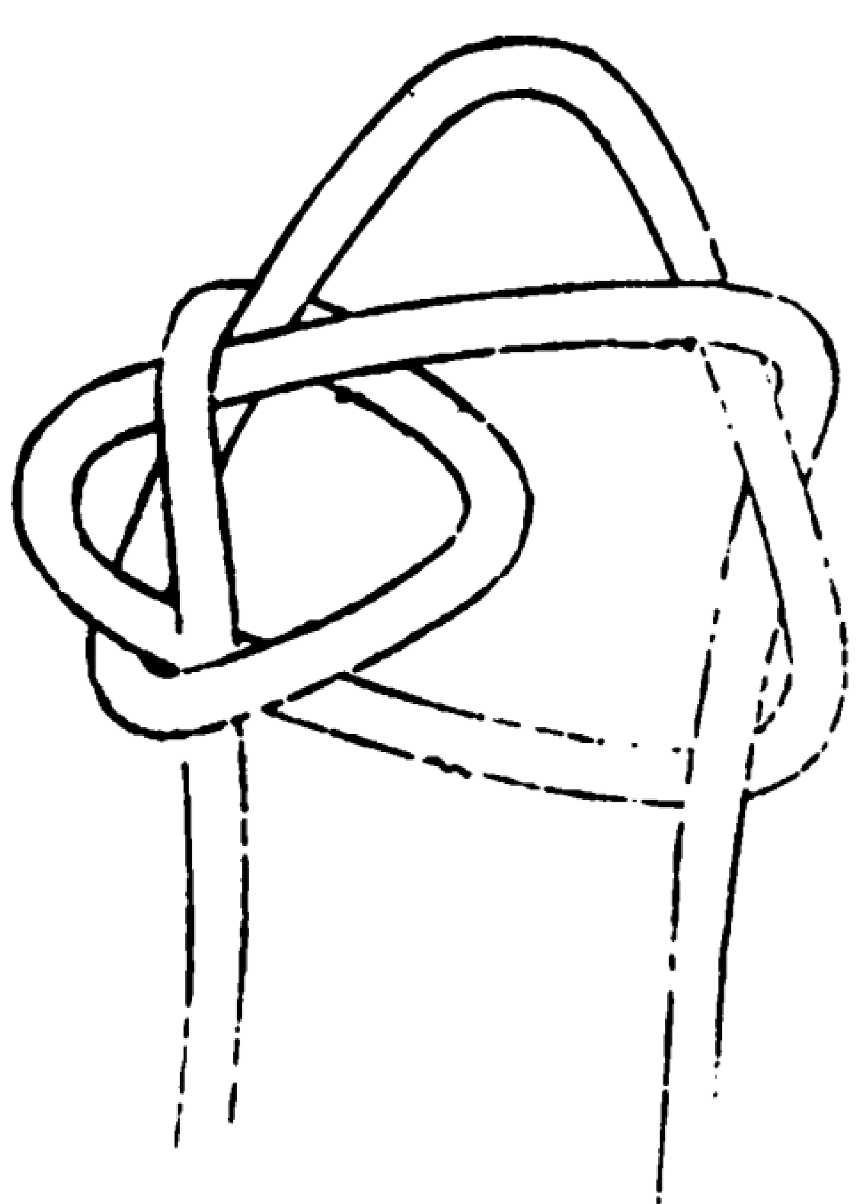
雲さわく山をみるたにすゝしきを　荒瀬ふさ子
やかてふりくるゆふたちの雨

たゝならぬ雲のけしきとみる程に　福木はる子
風すさましくゆふたちのふる

夕立のあめのしめりにさとひとの　青羽茂枝子
水わらろひのこゑ絶にけり

笠ぬひの里ときゝしも名のみにて　大橋てい子
ぬれつゝ過るゆふたちのあめ

草も木も枯るはかりのあつき日に　降田　槇子
おもひもかけす過るゆふたち



（其三）

つゆをたにいとふつゝみの才女草　市川　柳子

花につれなきゆふたちのあめ

たゝならしとはかり見てし一村の　山澤秋香子
雲やちさとにかゝるゆふたち

木の間陰風をまつちのやまの端に　平野きみ子
しはしはすゝし夕たちのあめ

かきくもり音もとゝろになる神の　岩崎今子
晴るゝもはやし夕たちのそら

むら雲のふもとにかゝる夕たちは　鎌形恒子
山ふところは空にやあるらん

鳴蟬のこゑもしめりてすゝしきは　鎌形楽子
こすゑにのこる夕たちのあめ

遠かたの峯こすくもとおもひしを　近山松子
はやこの里にかゝるゆふたち

久方のそらはそれとも見えぬまに　大矢ひさ子
にはかにかゝる夕たちのあめ

わかやどの軒のしのふに露とめて　磯部つや子
はやくもすくる夕たちのあめ

嬉しさにしはし詠むるひまもなく　廣瀨冬子
足とくすくるゆふたちのあめ

くさしはにあらぬわか身も夕立の　廣瀨さく子
あめころ夏のいのちなりけれ

外にはしゝきぬ取入るゝ間もなく　清水きよ子
ふると見るまにはるゝ夕たち

夕立のくもは見る間にこのさとに　中村なか子
かゝりて神のおとさへそする

なる神もこゑをとゝめて夕たちの　金田しけ子
過き行くあとそ涼しかりける

思はすもかとにきはひぬ夕たちに　林かの子
しは〳〵人のかさやとりして

見るうちにあしとくすきて夕立の　中村つき子
なこりすゝしく成にけるかな

なる神の音はとほしともおふまに　松下よし子
軒端にかゝるゆふたちのあめ

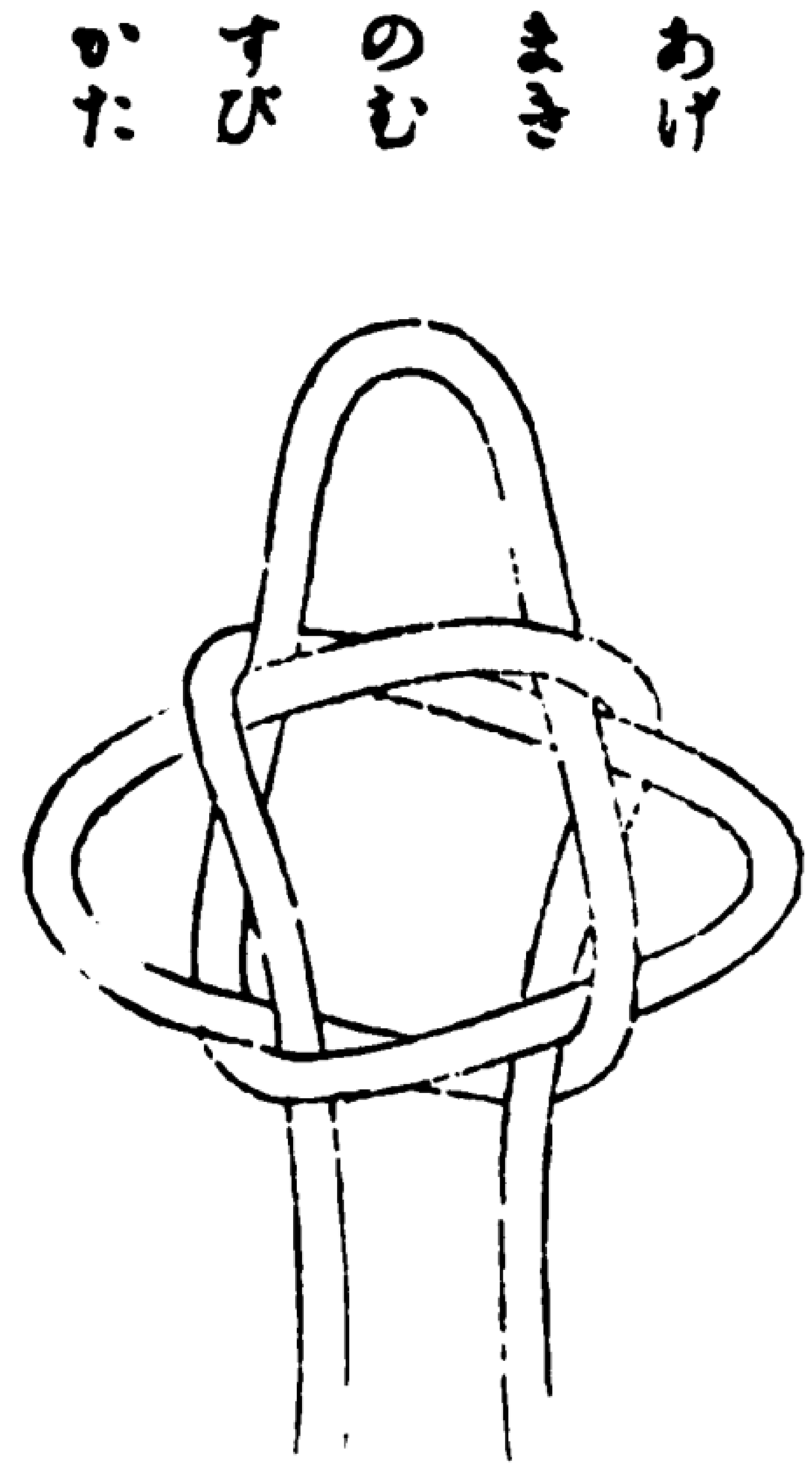
ふく人のとまをふかんと思ふまに　鈴木秋子
はやくもすきぬゆふたちの雨

行さきをいそきなからも軒かりて　橋本丹江子
しはしやすらふ夕たちのあめ

さらに又涼しくなりぬゆふたちの　松尾菫子

すきにしあとの峯のまつかせ

うすつきて賤か門邊にほすむきを
入れあへぬまにすくる夕たち　鈴木美恵子



（其四）

里人はゑみさかゆれとたひゝとの
わひしとかこつけふの夕たち　牧野幸子

てる日をは峯にのこして夕たちの
すきゆくかたの風のすゝしき　土屋ひろ子

あま雲もふもとは晴れて山の端に
よそめ涼しくゆふたちのふる　久松せい子

鳴かみの音はかりしてあまくもの
よそに過き行く夕たちのそら　三原照子

木々の葉の露のしら玉ふきちらし
あらしのはこふ夕たちのあめ　清水良子

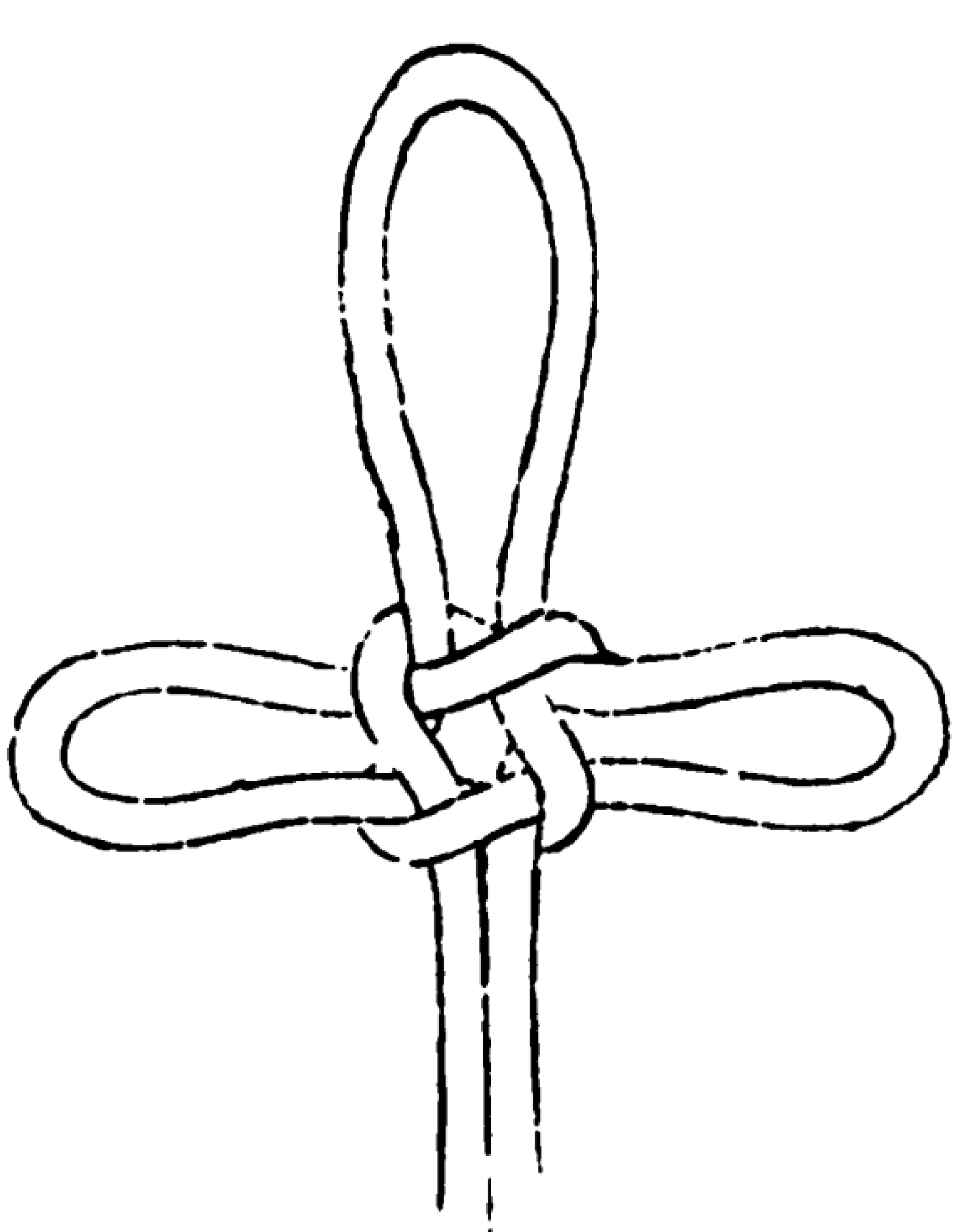
足とくもむかひの山にかゝりけり
今この野邊にふりしゆふたち　久門利恵子

鳴かみのおとさへそひてぬは玉の
よはにひとしき夕たちのあめ　青木春子

夕立のあめは晴れけりたまさゝの
露にすゝしきつきをのこして　國岡撰子

ゆふ立の晴れ行くかたに虹みえて
入江すゝしきなつのしまやま　仝　みき子

あげまきのむすびかた



（其五）

あつさをもなかゝてすゝし夕立の　國岡芳子

雨になしたるにはのたきつせ

なる神の音かしこしとおもふまに　國岡　初子
はれて涼しきゆふたちのそら

今かしもゆふたちあめのありま山　近藤千代子
ふもとにかゝる雲のひとむら

夕立はほとなくはれてまつか枝に　仝　郁子
散るもすゝしき玉のしらつゆ

風渡るかた野のくさにゆふたちの　仝　純子
あめのなこりの玉そみたるゝ

夕立のあめにしはしはしつか家も　寺田　松子
あつさ忘るゝのきのたまみつ

ゆふ立のかゝらぬさきと思ひてや　大松　菊子
あまの小舟のいそくなるらん

東路はゆふたちすらし乘るこまの　松田靜枝子
すゝ鹿のやまに雲かゝる見ゆ

音羽山木々のわかはにかせたちて　大海原芳子
涼しくすくるゆふたちのあめ

降りきぬと見るまに晴れて夕立は　雄久保みち子
あまとかいやるひまもなき哉

庭の上の草になこりのつゆとめて　坂本　乙子
涼しくすきぬゆふたちのあめ

降りきぬと見しまにはれぬ夕立の　大塚かう子
ゆく手にわれは何いそきけん

七月廿日兼題　海水浴

天　大坂市北區相生町百六十二番邸　梶井　久子

かけじや袖のといへりけん和泉國高師の濱はさわがしきちまたを遥に離れたる處なれど斯る暑さもなからましいざとて朝まだきより草の庵をたちいで住吉の浦をあとに見てあへぎ〳〵たどりつきしに實に思ひしに違はず雪の如き眞砂地しろ〴〵と廣きが中に幾木とも知らぬ老木の松青々として吹き通ふ風の聲の涼しくはや暑さを忘るゝばかりなり人々嬉しと思ひて木の間傳ひに汀の方へ立ち出づれど限りも知らぬ青海原より遠山眉の淡路島ゑめるが如く我をむかへ浪にただよふあま小舟ひら〳〵として我をまねくに似たりあなおもしろの眺やたぐひなの涼しさや斯る處に宿もがな那などい

ふ折しも海濱院の內より浴衣きたる人々むれ來り男はいちはやく磯かげより身を海水に入るれど女もやをらたち入りて流木などにとりつき浪にゆられなどしていと心地よげに見ゆこれぞ世にいふ海水浴ならんいかで一あみして見ばやと思ひしかど古人はぬるゝをだにもいとひしものを男はともあれ女の身としていかでさるわざせらるべきやとためらひしに「昔はむかし今はいま身もすこやかによはひを延ぶるわざなるを又よしあだ浪にあらばあれぬれずてそれを知らんものかは」など戲れつゝ「いざたまへ」と勸めて止まずされど强ひていなまんも惡かるべしと浴衣うちきて畏る〳〵浪間に分け入り腰のあたりまで浸り居れば實に言ひしも理とおぼえていと心地よしされどしほたれ衣はすひまもなく二日三日と日を送るに此處には夏もあざりけりとおぼゆるばかりにて中々我家のいぶせらさを思ひやれど今更かへるも心うし此儘こゝにめかりしはやくあまのをとめなりはててしがと思ふばかりになん

地

岡山市八番町　降田　槙子

世の開けゆくまゝに衛生の道を重んじかよわき人はもとよりすこやかなる人とはだ寒き冬の日には温泉に遊びこかねをとかす夏の日には海水浴に赴きて心身を養ふが多しさて海水浴と云ふはなみ靜けきいそべに浴場をしつらひてこれに入るなり此海水に浴して病のいえ身の强うなるは其水の中に含める鹽分などの働きにもよるなめれどまたそのあたりの景色のうるはしく世のちりをはなれて空氣のさわやかなるとわが身にまつはるしげきわざもなくて心のやすきとにもよるなるべしげに夏のあつき頃浮世をはなれてこゝに遊び朝な夕な海邊のけしきをながめあまがさまなどを見てくらすほど樂しきことはなかるべしされどこともまたほどを過ぐして長く海の水に浸り或は久しくそこに遊びくらし遊びあかすときは却りて身の害となることあり殊に女子などは家の事を營む妨げとなることもあらんまた思はざる事の出で來らんもはかりがたければみだりに海水浴にものするもあながちに

よき事とは定めがたし

人

牛込區市ヶ谷甲良町　青木　春子

皇國にて海水浴てふもの丶行はる丶はわづかに五六年このかたにしてその初めは房州館山の邊りに開かれしより世の人にもてはやされ年毎に榮え榮えて今は大磯江の島逗子鵠沼興津舞坂あるは須磨明石舞子が濱のかず／＼になり思ひ／＼に貴顯の人々の別莊などつくり旅館などは都も及ばぬほどに建て連ねていと／＼にぎやかになりぬ

海水浴のさまはその所々によりて異りとは云へ多くは磯邊に衣かへなどの爲めに小家のまうけありて海の中には打ち寄する波をさけんためにあまたの杭をうち立てまたならはぬもの丶ためにその杭より所々に繩をわたしてあり男も女も打ち交りて浴し男は裸体なるも女はメリヤスのはた衣あるは白木綿の單衣をまとひ頭には日の光りをさくるため大なる笠をうちきるなり

さても海水浴てふもの丶如何なる功能あるかときけばそは海水の中に鹽素あるはソヂユウムとよべる元素のふくみゐてそが人のはだにふれ自然に皮膚をとほして体内にしみこみ体熱とよべる熱のために化學的變化を起しその作用とかにて身體を健かにし諸々の病を治し中にもリウマチスとよべる病などは速かに全治すとなんされば年毎榮ゆくも道理にて人々のこがねをもとかす都の夏をはなれ緑の山浮きたる島あるは日の光のうつりて靜かる波のこがねの色をなしてきらめく中に帆あげたる船の所々にゆきかふなど畫にもか丶まほしき景色をながめつ丶浴せんはいかに樂しく嬉しき事ならんかし

されど我が日の本の女にはいかゞあらん男女うちまじりあやしきすがたしてうちさわぐは男女のけぢめも定かならぬ外國の女にはいざ知らずやさしきを尊びけだかきをめづる皇國の女のなすべきわざならんやあはれ夏の暑さを避けて身の涼しきを願ふには必ず海水浴に限るましたゞ朝夕にたらちねのめぐみの海に浴し賢女鑑烈女傳の德風にふかれなむ夏の暑さも忘れその身も自ら涼しかるべし

宇多田やう子

世に女として潮海に浴みするなとはあまりよそめよからぬ事と謂ふ人もあれど女は女のみ打むれて心靜かに浴みするは知らず〳〵の中に游泳の道をも覺ゑて萬一の遭難の助けともなり且つは身のやしなひともなりぬと聞けど何にいなむべき事あらんとて健かならぬ身は此頃の暑を堪へかねはしためと連れたちて須磨の浦なる海水浴場に出起ちぬこゝは名にしるき古跡にして淡路島と相對し風清く波靜かに帆あけたる大船小船はわたるか如く行き通ひ濱邊につゝくそなれの松は青々として白砂に映ずるなと限りなき眺にぞありける同じ女の友も集ひ來て朝な夕な共〳〵に浴みする身のこゝ地よき何にたとへん方なく此の程の暑はいつしか消ゑて日々に快よくなり行くやう覺ゑぬげに暑中の養生はこの海水浴にしくものぞなき

田中りん子

古へさすらへの身と成ぬる人はいさしらず深き窓のもとに小簾もる風の身にふるゝをもいとひかこへなす庭のはとりのやり水の流れすゞしくすみたまへる姫たちはかの行平の中納言の須磨の浦波に鹽汲海士とともにたきふしゝ給ひし物かたりなとよみて海士の子の見るめかるてふ鹽たれしさまを思ひ知るはかりなりしに近き比は海水浴てふ物開けゝれど夏のあつさをさけんとていと身かるくいでたちて海の邊りに宿りをもとめ身にははたへもあらはに見ゆるうすものをまとひ磯うつ浪を分入りてひたとはたへも鹽しみたるまゝ濱邊の眞砂地におきつまろびつうちふして興ありけにあそぶなんうれしきや

佐々有郷子

海水浴は神代のむかし大汝神のけたのさきの志ろうさぎを八十神のうしほにひたしてくるしめしことあるを水門にふりそゝぎがまの花をちらして疵をいやしいなどの素うさぎ神とならしめたまひし故事にはそむきたれどおなじ海邊の浴なれど水と潮とのけぢめはあれど同等の神傳なるべし世の人々たちはつとめて海水浴をなして病をいやし國の

大みたからとなりたまひてよ

吉田　芳子

暑を緑陰にさけ涼を高臺にむかふることを古よりこよなきさまに云ふめれど今一きはすぐれたるは海水浴にこそげに黄金をもとかすといひたきけむ此の頃の暑さに堪へかねて兄君にしたかひ大磯に遊ひぬ

朝とく起き出づれど見渡す限りはる〳〵と青布しきつめたらむが如き青海原に海士の小船の二つ三つだみ歌の聲もたか〳〵と掉ひきならして歸りくるありてそのさまにいかにたかり獲物多かりしならむなど思ひやられぬやがてま晝頃にもなりぬれどかりそめの浴衣に身をつゝみ輕き麥稈帽子にて頭をおほひ汀におりたちてゐるは入りゐるは出て思ふまゝに浴し果つれど波に碎けてちりくる花貝を拾ひつゝ妹の土産にせむと彼もおしからす是もおもしろしなど集むれど時のまに袂にみちたれど兄上に示すにをこかましき業よなと笑はるゝもねたし夕されは涼風靜にふき來りて肌さむき心地のせらるゝものからさすがにたれこめかねて端ゐしつつ沖を眺むれは遙けき浪まを破りて月かけの浮ひ出でたるさまげに秋にもまさりてこそ覺ゆれあはれ都の塵を洗ひあらかねの土もさくるはかりの暑さを忘るゝこと之にすくるものあらむやまして其心をも養ひ其体をも強うするに於ては

鈴木　秋子

大いその海邊にうちいでゝ見わたせばこゝかしこのみきはにたふときいやしきをとこをみなのうちむれてあそふさまいとをかしをりしもあれ汐風さつとふききてあはれすかたよき少女がかふりゐたるむきわら帽子とびて見る〳〵沖の方へなかれゆくに少女ははつかしけに顏にもみちをちらしゝをあはれとやおもひけんおもしろしとやおもひけんかたへにゐたる若人波をくゝりて沖へはるけくもその帽子をおひゆくさまのいといさましさにあたりの人々聲たてゝほめそやすぞをかしきあはれ海水浴のおかしきは爰にこそあらめかくさま〳〵面白きことのみなして日もくれけれどかなたの山の

江より月もさしのほりて小波にきらめくさまなどもいはれずすゞしくげにうきやすひなどもおのつからいゆるなるべしさるはみなかしこきわかおほ君のふかきみめぐみあればころ山にはいでゆ海にはかくわらはごときいやしきみさへ滊車にうちのれむわづか一日にてかゝる處に遊び夏をよそにもくらさるゝなれあはれ日ごと〳〵進みゆく明治の御代にうまれいでしこそまことにうれしくもまたたふとけれとれもはず袖をぞぬらしける

人の兒の
やゝになりてぞ
わが親の
おもひはいさゝ
おもひしらる

八月兼題

五日
- 歌　秋扇
- 文　雜誌を讀む

二十日
- 歌　女郎花
- 文　夏期休業の感

第拾卷第四號
七月十日發行

國光

毎月二回十日
二十五日發行

改良後の國光は號を重ぬるに從ひ愈光彩を放ち愈氣焔を吐く殊に本號社說には斯國家を如何せんとする乎●我邦の教育者は何を以て勅語に奉答せんとするや●俗論に媚ぶる勿れ各其本分を盡せ●慷慨する事を知て實際に其力を用ゐざる者は日本男兒に非ず●女子中等教育の矯正●千島號の勝訴を聞て感あり●日本國民の志嚮を亂す可らず等の痛快なる數個の論策を收め其論說には愼始愼終●俱樂部を設く可きの說●冷冷たれ●賃銀問題に就て●富國論等の時務を講する卓拔の眞文字を揭げ其文苑には金聲玉振の詩文に加ふるに最も趣味ある問宮林藏の書簡及吉野の殘花等を以てし又其雜錄欄内には公平虚心●誰か朝鮮を亡ぼす●東北の孤光●佐藤不死●只此二字あるのみ●政治界、國民兵●浮世●風呂●南無前田佛●彼の遺憾を憐む●鼓腹激昂●却て我よりも多きを知らずや●我は之を信ず●狼狽者にからかう勿れ●「タッ」問答●高い樣で廉いもの●阿弗利加取つたらどうする●愛嬌の安賣●其他時事數十件内外の要を盡し時務の機を操る

定價金一冊拾錢十二冊半ヶ年分壹圓十錢二十四冊壹ヶ年分二圓郵稅一冊一錢

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
(電話番號一九四六)
發行所 國光社

●苟も生を宇宙に寄する者は須らく一讀すべし

MENS SANA IN CORPŌRE SANO

●代價 一部金五錢十部前金四十五錢廿部同八十五錢三十部同一圓廿五錢五十部同二圓●全國無遞送料

●優待 警察官、郡區市町村衛生員、學校員諸氏にして其職名を證明し前金を添へて申込あれば代價の二割を減して御高需に應すへし但し前金送附に非らされは割引せす

注意 本社は明治廿六年十二月の創立に係る 本紙は保證金を納めたる政論的雜誌也

旬刊

衛生新報

●本領 何者の痴漢ぞ漫りに衛生を以て醫人の事と爲す。醫人由來衛生の一機關たるのみ。豈衛生の全體が醫人にのみ屬すへきものならんや。墺國の碩學斯多因曾て曰く。衛生は人體的國家の最大要素にして。國家若し之を缺かば其生活を保續し得るものにあらすと。然り衛生新報の本領は實に此廣義の衛生に在て存するなり。知らすや。吾人人類は今正に他種族生物と其生存の競爭を演しつゝあるを。生存の競爭。語を換ゆれば生理的圓滿の希望に外ならさるなり。故を以て吾人人類たる者は。苟も生を宇宙に寄するの間造次も衛生の規矩を踰ゆべからす。否。人類か衛生を忽諸に附すべからさるは。實に其生息間の至大責務なれば也。詩に云ふ。『既明且哲以保其身』と。失設露亦言ずや。Homineus nulla ae propius ab. Deas accendere, quam salusen hominibus dando. 生ある者は見よ此衛生新報を

發行所 東京京橋區元數寄屋町一丁目一番地 日本衛生新聞社 ●編輯所 本郷丸山福山町四番地 日本衛生新聞社編輯所

注文及會計に關する書信は發行所宛に●寄稿質疑通信等の書信及交換雜誌ハ編輯所宛に發せられたし

田口卯吉君閱
鹽島仁吉君編

日清戰史

第八卷(大尾)
●定價郵稅共一册十錢、全八册七十錢

世間日清戰爭の事を記するの書少からずと雖も或は單に新聞の拔書に止り或は僅に外交戰鬪の局部を記するに過ぎずして未だ全局を達觀し内外の形勢を詳察して其本末を記載せし者あらず其之あるは獨り我社の日清戰史也且敢て自畫自讚にあらず新聞雜誌の批評既に之を證せり嗚呼日清戰爭は我國位を上げて東洋の日本より世界の日本たらしめたり我國民たるもの豈其顛末を審にせずして可ならんや

發行所 東京京橋區彌左衛門町 經濟雜誌社

（明治二十四年八月八日内務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

本誌編輯上、都合有之候間、左の三回に限り、左の締切日限迄に、兼題原稿、御送附相成度候

八月五日の分は
七月廿五日締切

八月廿日の分は
八月十日締切

九月五日の分は
八月廿五日締切

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事　○別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし　若強ひて領收證を要せらるゝ方は　別に證書郵送料御送附の事　○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一册	六册（三ヶ月分）	十二册（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十八年七月十九日印刷
同年七月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所（電話番號一九四六）國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）